

郡 家 遺 跡
第95次発掘調査報告書

2020

神戸市教育委員会

郡 家 遺 跡
第95次発掘調査報告書

2 0 2 0

神戸市教育委員会

序

郡家遺跡は、六甲山南麓を流れる住吉川と石屋川に挟まれた平野部に位置し、縄文時代から中世に至る遺跡で、これまでに95次にわたる発掘調査が実施されています。

「郡家」という地名は、古代の官衙である「郡衙」に関連があると考えられており、当遺跡でも奈良時代から平安時代の建物跡が数多く確認されています。

今回の調査では、弥生時代後期と古墳時代後期の集落が確認されました。また、土石流や洪水の痕跡も検出され、これが集落の立地に大きな影響を与えていることが確認でき、集落の立地を考える上で重要な成果を得ました。本報告書が、地域の歴史研究や文化財の保護の資料として活用いただければ幸いです。

発掘調査並びに報告書刊行にご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

令和2年3月

神戸市教育委員会

例 言

1. 本書は神戸市東灘区御影中町2丁目に所在する郡家遺跡第95次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は共同住宅建設に伴うもので、神戸市教育委員会が三井不動産レジデンシャル株式会社から委託を受けて実施した。現地調査は平成30年11月26日から平成31年2月8日の期間で実施し、神戸市教育委員会文化財課 山口英正と田島靖大が担当した。
3. 調査地下層で検出した土石流堆積層については、京大名誉教授 増田富士雄氏に現地指導をいただいた。
4. 調査地で採取した土壌分析業務については、一般社団法人 文化財科学研究センターに委託した。
5. 出土遺物の整理は、平成31年度に神戸市埋蔵文化財センターで実施し、文化財課 中村大介、山田佑生、山口が担当した。
6. 出土遺物の写真撮影は楠華堂内田真紀子氏に委託した。
7. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1/25000地形図「西宮」「神戸首都」・神戸市発行の1/2500地形図「住吉」「六甲」である。
8. 本書に用いた方位・座標は、平面直角座標系第V系（世界測地系）を用い、標高は東京湾中等潮位（T.P.）で示した。
9. 本書の執筆については、「第3章第1節 神戸市東灘区郡家遺跡で観察された土石流堆積物」については、増田富士雄氏の玉稿を賜った。「第3章第2節 郡家遺跡第95次調査にかかる古環境分析」については、一般社団法人文化財科学研究センターに委託した。その他については山口が担当し、編集を行った。
10. 調査で出土した遺物および写真・図面等の記録類、分析資料については、神戸市埋蔵文化財センターにて保管している。
11. 調査にあたっては、三井不動産レジデンシャル株式会社より多大なご協力を頂いた。記して感謝を申し上げます。

目次

序		第2章 発掘調査の成果	12
例言		第1節 基本層序	12
目次		第2節 古墳時代後期以降	14
第1章 はじめに	1	第3節 古墳時代中期後半から後期	17
第1節 調査に至る経緯と経過	1	第4節 弥生時代後期	32
1 調査に至る経緯	1	第3章 自然科学的考察	39
2 調査組織	1	第1節 神戸市東灘区郡家遺跡で観察された土石流堆積物	40
3 調査の経過	2	第2節 郡家遺跡第95次調査にかかる古環境分析	46
第2節 郡家遺跡の立地と歴史的環境	3	第4章 まとめ	52
1 遺跡の立地	3	第1節 調査地と周辺の動向	52
2 歴史的環境	3	第2節 郡家遺跡における古墳時代の集落変遷	52
3 郡家遺跡の既往の調査	7		

図版目次

第1図 調査区設定図	2	第24図 SK204平・断面図	26
第2図 遺物掘影状況	2	第25図 遺構出土遺物実測図	26
第3図 郡家遺跡の位置	3	第26図 SD301内SX301遺物出土状況平面図	27
第4図 郡家遺跡と周辺の主な遺跡	4	第27図 SD301断面図	28
第5図 郡家遺跡調査地位置図	8	第28図 SD301内SX301出土遺物実測図	29
第6図 土層断面(南壁)	12	第29図 SD301土層出土遺物実測図	30
第7図 東・南壁断面図	13	第30図 SD202出土遺物実測図	31
第8図 古墳時代後期以降の遺構	14	第31図 SD203出土遺物実測図	31
第9図 旧耕土層出土遺物	15	第32図 弥生時代後期遺構面	32
第10図 SB101平・断面図	15	第33図 SB301遺物出土状況	33
第11図 遺構出土遺物実測図	16	第34図 SB301平・断面図	33
第12図 2区柱穴群	16	第35図 SB301出土遺物実測図	34
第13図 古墳時代中期後半から後期の遺構	17	第36図 SD301下層出土遺物実測図(1)	36
第14図 須恵器甕出土状況平・断面図	18	第37図 SD301下層出土遺物実測図(2)	37
第15図 古墳時代後期遺構面・包含層出土遺物実測図	19	第38図 下層土石流検出状況	39
第16図 SB201平・断面図	20	第39図 調査地の位置(二重丸地点)と住吉川扇状地の地形分類	40
第17図 SB201焼土・炭出土状況	21	第40図 土石流礫の様子	42
第18図 SB201出土遺物実測図	21	第41図 地層断面	42
第19図 SB202平・断面図	22	第42図 土石流堆積物の巨礫の配列の様子	42
第20図 SB202出土遺物実測図	23	第43図 土石流堆積物の礫のみかけの長軸配列の変化	44
第21図 SB203出土遺物実測図	23	第44図 土砂流堆積物(第4層)に発達する停止時に形成された剪断面に沿って並んだ礫粒子	44
第22図 SB203平・断面図	24		
第23図 SB205平・断面図	25		

第45図 郡家遺跡第95次調査の花粉……………50	第47図 郡家遺跡堅穴建物の立地の推移……………56
第46図 郡家遺跡第95次調査の珪藻……………50	

表目次

表1 郡家遺跡既往調査一覧表(1)……………9	表4 郡家遺跡第95次調査における珪藻分析結果……………50
表2 郡家遺跡既往調査一覧表(2)……………10	表5 郡家遺跡堅穴建物一覧表(1)……………54
表3 郡家遺跡第95次調査における花粉分析結果……………48	表6 郡家遺跡堅穴建物一覧表(2)……………55

写真図版目次

写真図版1

- 1・2区 第1遺構面全景(北東から)
- 1・2区 第1遺構面全景(北から)

写真図版2

- 1・2区 第1遺構面全景(北西から)
- 3・4区 第1遺構面全景(北西から)

写真図版3

- 3区 SB101(南東から)
- 4区 耕作痕(西から)

写真図版4

- 1・2区 第2遺構面全景(北東から)
- 1・2区 第2遺構面全景(北から)

写真図版5

- 1・2区 第2遺構面全景(北西から)
- 1区 SB201(北から)

写真図版6

- 1区 SB201炭・白色粘土検出状況(南西から)
- 1区 SB202(南東から)

写真図版7

- 2区 SB203(南西から)
- 2区 SK204(西から)

写真図版8

- 4区 第2遺構面全景(南西から)
- 4区 SB205(南西から)

写真図版9

- 4区 南端部出土須恵器甕底部外面(西から)
- 4区 南端部出土須恵器甕肩部内面(北東から)

写真図版10

- 1・2区 SD301堆積状況(南から)
- 1・2区 SD301(北西から)

写真図版11

- 1・2区 SD301内SX301遺物出土状況(南東から)
- 1・2区 SD301内SX301遺物出土状況(北西から)

写真図版12

- 3区 SB301(南から)
- 3区 SB301遺物出土状況(北西から)

写真図版13

- SB202出土遺物
- SD301出土遺物

写真図版14

- SB202出土遺物
- 写真図版15
- SD301内SX301出土遺物

写真図版16

- SD301上層・SD202・SK204・SK205出土遺物

写真図版17

- SD201・SD202・SB301上層・4区包含層出土遺物

写真図版18

- SD301下層・SB301出土遺物

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と経過

1 調査に至る経緯

郡家遺跡第95次発掘調査は、神戸市東灘区御影2丁目13-1において平成30年度に実施したもので、共同住宅建設に伴う開発事業を契機とする。試掘調査の結果、埋蔵文化財の存在が確認され、工事により埋蔵文化財が影響を受ける範囲約400㎡について、平成30年11月26日から平成31年2月8日まで発掘調査を実施した。翌令和元年度に遺物整理と発掘調査報告書の作成を行った。

2 調査組織

平成30年度（現地調査）

神戸市文化財保護審議会 史跡・考古資料担当

黒崎 直 大阪府立弥生文化博物館館長

菱田 哲郎 京都府立大学文学部教授

神戸市教育委員会事務局

教育長	長田 淳	文化財課担当係長	松林 宏典
総務部長	浜本 泰幸	同	中村 大介
教育施策推進担当部長	荒牧 重孝	事務担当学芸員	池田 毅
文化財課長	千種 浩	遺物整理担当学芸員	阿部 功
埋蔵文化財センター担当課長	安田 滋	保存科学担当学芸員	山田 佑生
埋蔵文化財係長	前田 佳久	調査担当学芸員	山口 英正
文化財課担当係長	齋木 巖	同	田島 靖大
同	東 喜代秀		

令和元年度（報告書作成）

神戸市文化財保護審議会 史跡・考古資料担当

黒崎 直 大阪府立弥生文化博物館名誉館長

菱田 哲郎 京都府立大学文学部教授

神戸市教育委員会事務局

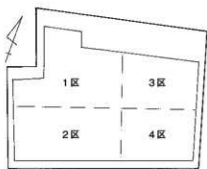
教育長	長田 淳	文化財課担当係長	松林 宏典
教育次長	後藤 徹也	同	中村 大介
文化財課長	安田 滋	事務担当学芸員	阿部 敬生
埋蔵文化財センター担当課長	前田 佳久	遺物整理・保存科学担当学芸員	
埋蔵文化財係長	東 喜代秀		山田 佑生
埋蔵文化課担当係長	齋木 巖	整理担当学芸員	山口 英正

3 調査の経過

調査対象地は東西2筆の宅地であり、東半部は厚さ1mを超える盛土による造成がなされていた。作業の効率を図るため、埋蔵文化財に影響のない表土の一部を事前に場外処分し、西半部から調査を実施した。

平成30年11月26日より西半部(1・2区)の重機掘削を開始、順次人力による遺構面の検出作業を実施した。11月29日に重機掘削が完了し、遺構面の精査、遺構掘削を実施した。12月10日に第1遺構面の全景撮影を実施し、遺構の図化を開始した。12月12日より下層遺構面の検出を行い、古墳時代後期の竪穴建物等の遺構を検出した。12月20日に第2遺構面の全景撮影とドローンによる空撮を実施し、遺構の図化を開始した。平成31年1月11日に弥生時代後期の流路の撮影、実測を実施し、西半部の調査を完了した。1月15日より重機による西半部の埋め戻しと、東半分(3・4区)の掘削を開始した。1月17日に重機掘削が完了し、順次遺構面の精査、遺構掘削を実施した。1月18日に第1遺構面の全景撮影を実施し、遺構の図化を開始した。1月21日より下層遺構面の検出作業を行い、弥生時代後期の竪穴建物、古墳時代中期後半から後期の掘立柱建物等を検出した。1月25日に第2遺構面の全景撮影を実施し、遺構の図化を開始した。1月28日に京都大学名誉教授 増田富士雄先生による現地指導を頂き、下層土石流についての指導を受けた。1月29日に3・4区のドローン撮影を実施した。2月1日より下層土石流の確認トレンチの掘削を開始し、2月6日に増田先生による2度目の現地指導を受けた。2月7日に古墳時代後期の遺物包含層の土壌サンプルを採取し、重機による埋め戻しを開始した。2月8日に埋め戻しが完了し、現地調査を終了した。

出土遺物の整理作業は、すべて神戸市埋蔵文化財センターで実施した。28ℓコンテナ30箱の遺物の水洗作業を実施した後、出土情報のマーキング、接合作業を行った。順次遺物の図化を実施し、遺物撮影が必要な資料は彩色を行い、令和元年11月19・20日に楠華堂による撮影を実施した。上記の資料と現地での記録を構成し、令和2年3月に、本報告書の刊行をもって郡家遺跡第95次調査に関する全ての調査作業を完了した。



第1図 調査区設定図



第2図 遺物撮影状況

第2節 郡家遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地

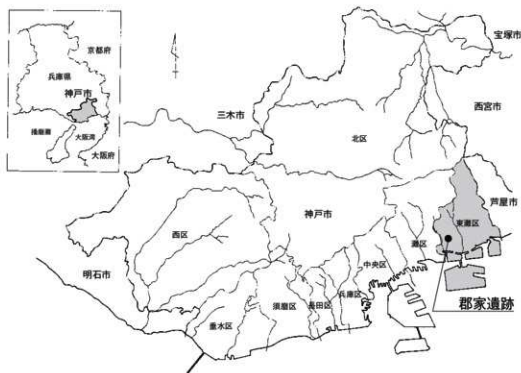
郡家遺跡は、神戸市南東部の東灘区に位置し、東側に住吉川、西側に石屋川が流れる六甲山系南麓地域の狭長な平野に立地する。六甲山系は風化の進んだ花崗岩類から構成されており、山腹は急峻であるため、非常に崩壊しやすい特性を有している。六甲山系南麓を流下する河川は、急傾斜を経て平野部に至るため、出水時には土石流を伴う事が多い。明治以降、治山治水工事が施されたが、1938年（昭和13年）の阪神大水害では、当遺跡の東側に隣接する住吉町町遺跡で、厚さ2mを超える洪水堆積層が確認されるほどの大規模な被害をもたらしている。当遺跡においても、基盤層は土石流を伴う砂礫層で構成されており、今回の調査地の下層でも同様の堆積層が確認された。

2. 歴史的環境

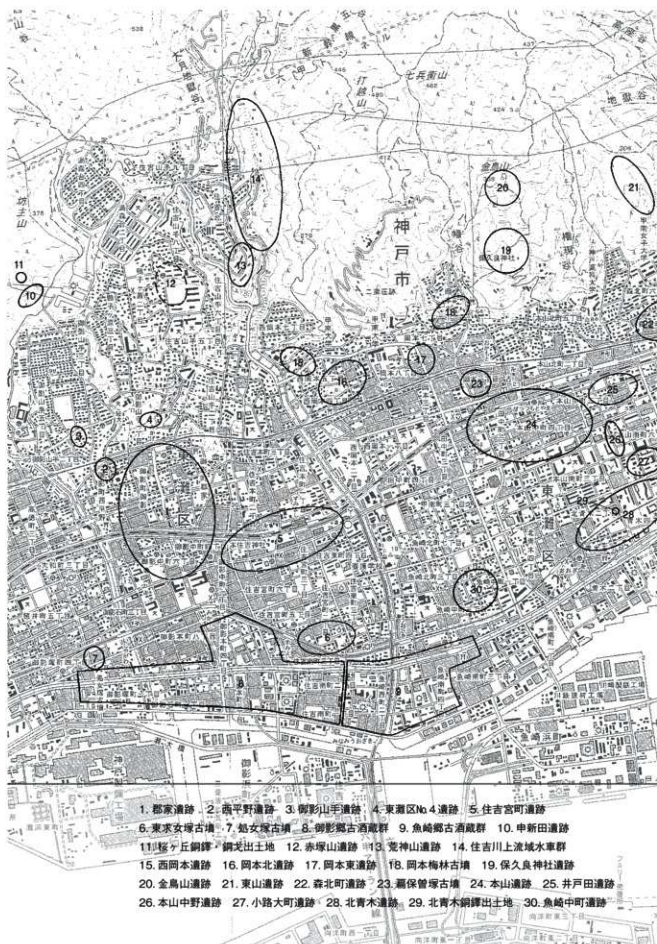
六甲山系南麓地域は、市内でも特に遺跡が集中する地域で、東灘区から灘区にかけて、旧石器時代から近世に至る遺跡が数多く立地している。

旧石器時代 当時期の遺跡は少なく、後期のナイフ型石器が出土した本山遺跡¹、西岡本遺跡²、岡本北遺跡³、滝ノ奥遺跡⁴等が知られる。

縄文時代 草創期の有茎尖頭器が滝ノ奥遺跡⁵、本山遺跡⁶で出土している。早期の高山寺式土器を伴う遺構は、郡家遺跡御影中町地区⁷で土坑、西岡本遺跡⁸で竪穴建物が検出されている。前期では、丘陵上に位置する申新田遺跡⁹で玦状耳飾りが出土したと伝わっており、後期では平野部の本庄町遺跡¹⁰で貯蔵穴が確認されている。



第3図 郡家遺跡の位置



1. 都家遺跡 2. 西平野遺跡 3. 御影山手遺跡 4. 東灘区No.4遺跡 5. 住吉宮町遺跡
6. 東求女塚古墳 7. 始女塚古墳 8. 御影郷古酒蔵群 9. 魚崎郷古酒蔵群 10. 申新田遺跡
11. 笹ヶ丘銅鐸・銅戈出土地 12. 赤塚山遺跡 13. 覚神山遺跡 14. 住吉川上流域水車群
15. 西岡本遺跡 16. 岡本北遺跡 17. 岡本東遺跡 18. 岡本梅林古墳 19. 保久良神社遺跡
20. 全鳥山遺跡 21. 東山遺跡 22. 森北町遺跡 23. 扇保曾塚古墳 24. 本山遺跡 25. 井戸田遺跡
26. 本山中野遺跡 27. 小路大可遺跡 28. 北青木遺跡 29. 北青木銅鐸出土地 30. 魚崎中町遺跡

第4図 都家遺跡と周辺の主な遺跡

弥生時代 縄文時代晩期から弥生時代前期初頭まで集落が継続する本山遺跡¹¹では、近畿地方最古の弥生土器に伴う農耕具等の木製品が検出され、当地域の農耕開始期の様相を示す例として重要である。前期の水田は、北青木遺跡¹²、本庄町遺跡¹³などで確認されている。中期には、前期から継続する遺跡に加え、住吉宮町遺跡¹⁴など、より標高の高い平野部に集落が形成される。中期後葉には、丘陵上にも集落が形成され、保久良神社遺跡¹⁵、金烏山遺跡¹⁶、滝ノ奥遺跡¹⁷、荒神山遺跡¹⁸などで高地性集落が営まれる。当地域の弥生時代中期を特徴づけるものとして、銅鐸をはじめとする青銅器の出土が多いことがあげられる。桜ヶ丘銅鐸・銅戈出土地¹⁹、保久良神社遺跡²⁰、本山遺跡²¹、北青木遺跡²²等で青銅器の埋納遺構が確認されている。後期には、さらに集落の分布が広がり、郡家遺跡²³で集落が盛行し、深江北町遺跡²⁴、北青木遺跡²⁵、住吉宮町遺跡²⁶では、後期から古墳時代初頭の円形周溝墓や方形周溝墓が確認されている。

古墳時代 前期には、海岸線沿いに前方後方墳の西求女塚古墳²⁷、処女塚古墳²⁸、前方後円墳の東求女塚古墳²⁹、扁保曾塚古墳³⁰などの大型の古墳が築造される。中期には、住吉宮町遺跡³¹内で古墳群が形成される。盟主的な古墳と考えられる坊ヶ塚古墳³²や住吉東古墳³³に先行する5世紀初頭の方墳³⁴が築造されたのち方墳群と集落が形成され、中期から後期にかけて、郡家遺跡³⁵と共に当地の拠点的な集落となる。後期には、段丘上に小規模な古墳が築造されるようになり、御影山手遺跡³⁶、岡本梅林古墳³⁷・³⁸、西岡本遺跡³⁹などで、横穴式石室を主体とする古墳群が形成される。

奈良・平安時代 古代山陽道沿いの遺跡から、当時期の遺構が確認されている。郡家遺跡⁴⁰では、規格性のある掘立柱建物群が検出され、菟原郡衙の推定地とされている。深江北町遺跡⁴¹・⁴²では「驛」と記された墨書土器や木簡、帯金具等が出土し、古代山陽道の葦屋驛家の最有力地と考えられている。住吉宮町遺跡⁴³では、土馬や墨書土器が出土している。

中世以降 耕作面積が拡大し、集落は可耕地全域に広がる。住吉宮町遺跡⁴⁴、郡家遺跡⁴⁵等で掘立柱建物が検出されている。江戸時代中期以降は、酒造業が隆盛を迎え、海浜部に魚崎郷古酒造群⁴⁶、御影郷古酒造群⁴⁷が形成される。山麓部では急峻な地形を利用した水車⁴⁸による精米や搾油業が盛行した。

註

- 1 安田滋・藤井整「本山遺跡第20次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
- 2 浅岡俊夫編「神戸市東灘区西岡本遺跡」六甲山麓遺跡調査会 2001
- 3 浅岡俊夫編「神戸市東灘区岡本北遺跡」六甲山麓遺跡調査会 1992
- 4 黒田恭正・阿部敬生「滝ノ奥遺跡」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1984
- 5 4に同じ
- 6 1に同じ
- 7 「郡家遺跡 郡家中町地区第3次調査概報」神戸市教育委員会 1990
- 8 2に同じ
- 9 新修神戸市史編集委員会編「縄文人のくらし」『新修神戸市史』歴史編1 自然・考古 1989

- 10 別冊洋二編「本庄町遺跡」兵庫県文化財調査報告第92冊 兵庫県教育委員会 1991
- 11 安田遊「本山遺跡第17次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998
- 12 川上厚志・井上麻子編「北青木遺跡第7次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2014
- 13 片岡 肇編「神戸市東灘区本庄町遺跡発掘調査報告書」財団法人古代学協会 1985
- 14 丸山 謙・須藤 宏・松林宏典「住古宮町遺跡第11次調査」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994
- 15 石野博信「神戸市金島山遺跡 - 保久良神社、銅支出土地点の裏山」古代学研究第48号 古代学研究所 1967
- 16 新修神戸市史編集委員会編「金島山遺跡」『新修神戸市史』歴史編1 自然・考古 1989
- 17 4と同じ
- 18 阿久津久「荒神山遺跡調査概報」神戸市教育委員会 1970
- 19 武藤 誠・村上行弘「神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査報告書」兵庫県教育委員会 1969
- 20 新修神戸市史編集委員会編「保久良神社遺跡」『新修神戸市史』歴史編1 自然・考古 1989
- 21 「本山遺跡第12次調査の概要」神戸市教育委員会 1991
- 22 東喜代秀「北青木遺跡第5次調査」『平成18年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2009
- 23 本書 既往調査一覧参照
- 24 山下史郎編「神戸市東灘区深江北町遺跡」兵庫県教育委員会 1988
- 25 12と同じ
- 26 渡辺 昇「坊ヶ塚遺跡(住古宮町遺跡群Ⅱ)」兵庫県教育委員会 1990
- 27 安田 遊編「西求女塚古墳発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2004
- 28 神戸市教育委員会編「史跡坊ヶ塚古墳」1985
- 29 渡辺伸行「東求女塚古墳」『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1985
- 30 新修神戸市史編集委員会編「ヘボン塚」『新修神戸市史』歴史編1 自然・考古 1989
- 31 西岡誠司・山本雅和「住古宮町-第1次調査-」『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1988他
- 32 渡辺 昇「坊ヶ塚遺跡(住古宮町遺跡群Ⅱ)」兵庫県教育委員会 1990
- 33 丹治康明・東喜代秀「住古宮町遺跡第9次調査」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994
- 34 石島三和「住古宮町遺跡第52次調査」『平成28年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2019
- 35 本書 既往調査一覧参照
- 36 岡野 豊「御影山手遺跡第2次発掘調査概報」神戸市教育委員会 2006
- 37 吉井吉秀「摂津国武庫郡岡本村の小石室に就いて」『考古学雑誌』3-11 1913
- 38 山口英正「岡本梅林古墳第1次調査」『平成14年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2005
- 39 2と同じ
- 40 本書 既往調査一覧参照
- 41 村上賢治他「神戸市東灘区深江北町遺跡(Ⅱ)」兵庫県教育委員会 1991
- 42 山本雅和編「深江北町遺跡第9次埋蔵文化財発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2002
- 43 菊池逸夫・神野信「住古宮町遺跡第23次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
- 44 菅本宏明・平田朋子「住古宮町遺跡第29次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000他
- 45 本書 既往調査一覧参照
- 46 須藤 宏「魚崎郷古酒蔵群第3次調査報告書」『平成19年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2010
- 47 黒田 恭正「御影郷古酒蔵群第4次調査報告書」神戸市教育委員会 2007
- 48 井尻 精「住古川上流域水車群八幡場水車群確認調査」『平成18年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2009

3. 郡家遺跡の既往の調査

郡家遺跡は神戸市東灘区御影、御影郡家、御影中町に位置し、東西約800m、南北約1kmの範囲に広がる複合遺跡である。当遺跡内の調査地点名は、平成10年度までは小字名毎に調査次数を付していたが、平成11年度以降、遺跡内の調査次数を連番に変更している。旧御影町御影、旧御影町郡家において、平成20年11月11日に住居表示が実施され、小字名が公的には使用されなくなったが、広範な遺跡内の場所を示すのに有意であり、当報告書では、適宜旧地区名を用いる。

昭和53年度に大蔵地区で実施された調査以来、今回の調査で95次を数え、縄文時代から中世に至る遺構、遺物が確認されている。今回の調査地は城ノ前地区に位置し、調査数が最も多い地区であり、弥生時代後期、古墳時代中期から後期、中世を中心とした時期の遺構、遺物が多数検出されている。ここでは、城ノ前地区を中心に既往の調査成果について記す。

弥生時代中期以前の遺構は少なく、最も古い遺構は、御影中町地区で縄文時代早期の土坑が検出されている(27次)。当遺跡で顕著な集落が確認されるのは弥生時代後期であり、城ノ前地区を中心に遺構、遺物が確認されている。竪穴建物は城ノ前地区(11-3、15、26、29、35、57、71、95次)や岸本地区(23次)、墓域は城ノ前地区の北半部に存在し、方形周溝墓(4-5次)、円形周溝墓(5、8-1次)、集石墓(17次)、土器棺墓(11-1次)が確認されている。自然流路は城ノ前地区(4-1、4-2、11-3、13、14-2、28、30、50、75、85次)、篠ノ坪地区(36、37、40、41次)、下山田地区(45次)等で検出され、遺物量も豊富である。遺構、自然流路、遺物包含層からは、弥生時代中期以前の以前の遺物はほとんど検出されず、弥生時代後期から古墳時代初頭に集落が一気に拡大したと考えられる。

古墳時代中期から後期にかけては当遺跡が最も盛行する時期である。TK73型式期の須恵器の出土は、城ノ前地区等で散見されるが、明確な遺構としては、御影中町地区(77、83次)と篠ノ坪地区(40次)においてTK216型式期のカマドを持つ竪穴建物が検出されている。集落はTK23・47型式期に規模が拡大し、豊富な遺構、遺物が検出されている。当遺跡の竪穴建物の動向については、第4章にて解説する。掘立柱建物は、竪穴建物より分布範囲が広がり、城ノ前地区(11-3、11-5、14-4、17、52、57、75、82次)以外に、岸本地区(10次)、下山田地区(12次)、地蔵元地区(24次)、篠ノ坪地区(44、46次)、上ノ山地区(65次)、御影中町地区(70、77次)で確認されている。低位の平野部に位置する御影中町地区(27、70次)では、TK216～47型式期の水田が確認されている。また、洪水によって埋没した自然流路が城ノ前地区(17、59、95次)、篠ノ坪地区(30、42-1、51、53、74次)、堂ノ裏地区(73次)等で確認されており、集落の立地に影響を与えている。時期が特定できた洪水の時期は、集落の盛行期に相当し、流路が埋没した後まもなく、再び生活域として利用している例が旧城ノ前地区(17次)等で確認されており、土地利用を考える上で重要である。同時期の墓域の位置は不明であるが、小石室を主体とする7世紀の古墳が下山田地区(45次)で2基検出されている。また、大蔵地区(61次)では、飛鳥時代の掘立柱建物が検出されており、後述する奈良時代以降の規格性を持った掘立柱建物に先行する遺構として重要である。

奈良・平安時代の遺構の検出数は少ないが、掘立柱建物が、大蔵地区(1、20、61次)、城ノ前地区(3、5、58、85次)、下山田地区(16、67次)、御影中町(70、83次)等で検出されている。特に大蔵地区では、1辺1m前後の大型の方形掘形を持つ掘立柱建物が数棟検出され、郡衙推定地の根拠となっている。



第5図 郡家遺跡調査地位位置図

郡家遺跡既往調査文獻一覧

- 1 「郡家大藏遺跡」現地説明会資料 神戸市教育委員会 1979
- 2 「郡家中町遺跡」[昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 1983
- 3 「郡家遺跡」[昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 1983
- 4 「郡家遺跡(城ノ前・地蔵元地区)、天神川遺跡」[昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 1986
- 5 「郡家遺跡(城ノ前地区第5・6・7・8・11次)」[昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 1987
- 6 「郡家遺跡(城ノ前地区第12～16次)、岸本地区」[昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 1988
- 7 「郡家遺跡(城ノ前17～23次、下山田1次)」[昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 1989
- 8 「郡家遺跡(城ノ前24～27次、大藏2・3次他)」[昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 1990
- 9 「郡家遺跡(御影中町地区第2次調査)」[昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 1991
- 10 「郡家遺跡 郡家中町地区第3次調査概報」神戸市教育委員会 1990
- 11 「郡家遺跡(大藏地区)」[平成元年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 1992
- 12 「郡家遺跡—神戸市東灘区所在 御影中町地区第4次調査」大手前女子大学史学研究所 1992
- 13 「郡家遺跡Ⅰの発掘調査」[淡神文化財協会ニュース] 創刊号 1990
- 14 「郡家遺跡の発掘調査(2)～(5)」[淡神文化財協会ニュース] 2～5号 1990
- 15 「郡家遺跡(城ノ前地区)」[平成2年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 1993
- 16 「郡家遺跡(藤ノ坪地区第2次調査他)」[平成3年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 1994
- 17 「郡家遺跡(藤ノ坪地区第5次調査他)」[平成4年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 1995
- 18 「神戸市東灘区 郡家遺跡—藤ノ坪地区第10次調査—」六甲山麓調査会 1995
- 19 「郡家遺跡(下山田地区第4次調査他)」[平成5年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 1996
- 20 「郡家遺跡(岸本地区第3次調査)」[平成6年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 1997
- 21 「郡家遺跡(城ノ前地区第32～34次調査他)」[平成7年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 1998
- 22 「郡家遺跡(御影中町地区第6次調査他)」[平成8年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 1999
- 23 「郡家遺跡(城ノ前地区第35～38次調査他)」[平成9年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 2000
- 24 「郡家遺跡(城ノ前地区第39次調査他)」[平成10年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 2001
- 25 「郡家遺跡(第65次調査他)」[平成11年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 2002
- 26 「郡家遺跡(第66～69次調査)」[平成12年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 2003
- 27 「郡家遺跡(第70・71次調査)」[平成13年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 2004
- 28 「郡家遺跡(第71・72次調査他)」[平成14年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 2005
- 29 「郡家遺跡(第73～75次調査他)」[平成15年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 2006
- 30 「郡家遺跡75次発掘調査報告書」村尾 政人 2004
- 31 「郡家遺跡(第77次調査)」[平成16年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 2007
- 32 「郡家遺跡(第78次調査)」[平成17年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 2008
- 33 「郡家遺跡(第81・82次調査)」[平成18年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 2009
- 34 「郡家遺跡第八十三次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2008
- 35 「郡家遺跡(第84次調査)」[平成20年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 2011
- 36 「郡家遺跡第85次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2011
- 37 「郡家遺跡(第86・87次調査)」[平成23年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 2014
- 38 「郡家遺跡(第88～90次調査)」[平成24年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 2015
- 39 「郡家遺跡(第91次調査)」[平成25年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 2016
- 40 「郡家遺跡(第92次-a調査)」[平成26年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 2017
- 41 「郡家遺跡(第92次-b調査)」[平成27年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 2018
- 42 「郡家遺跡(第93次調査)」[平成28年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 2019
- 43 「郡家遺跡(第94次調査)」[平成29年度神戸市埋蔵文化財年報] 神戸市教育委員会 2020
- 44 「郡家遺跡第95次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2020(本書)

第2章 発掘調査の成果

今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代後期以降に至る遺構、遺物を検出した。遺構検出面は2面であるが、遺物包含層と遺構出土遺物の検討から、遺構の時期を3期に分類した。主要な遺構は、弥生時代後期の竪穴建物、自然流路、古墳時代中期後半から後期の竪穴建物3棟、掘立柱建物1棟、自然流路、古墳時代後期以降の掘立柱建物1棟、耕作痕である。古墳時代中期後半の遺物量が最も多く、TK23・47型式期の須恵器を主体とする。

第1節 基本層序

現代の盛土層及び整地層の下層に、中世から近世の耕作土が数層存在する。調査区北半部では、耕作に伴う造成の影響が地山まで及んでおり、弥生時代後期から古墳時代後期以降の遺構を同一面で検出した。調査区南東部(4区)では、旧耕作土の下層に古墳時代中期後半から後期の遺物包含層(暗灰色粘性砂質土～黒灰色砂質土)が残存していた。遺物包含層から出土した遺物は、TK23・47型式期の須恵器を主体とするため、遺物包含層上面で検出した遺構の時期は、古墳時代後期以降と考えられる。

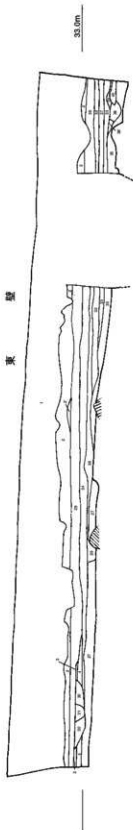
遺物包含層直下の遺構検出面(淡橙灰色粗砂～砂礫層上面)で、掘立柱建物、土坑、完形の須恵器甕等を検出した。弥生時代後期の遺物が出土した竪穴建物(SB301)と自然流路を除き、TK23・47型式期の遺構と考えられる。

淡橙灰色粗砂～砂礫層より下層では、埋蔵文化財は存在せず、同層中には1mを超える自然石が含まれていた。下層のトレンチ調査により、弥生時代後期以前の土石流の痕跡であることが確認された。増田富士雄氏より、調査地内で停止した土石流により、遺構の立地に影響を与えているとの教示を得た。詳細は第3章第1節の増田氏の論考を参照いただきたい。

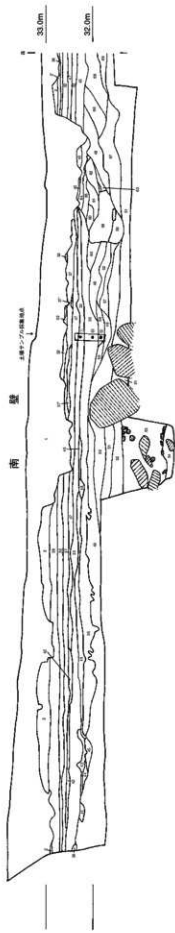


第6図 土層断面(南壁)

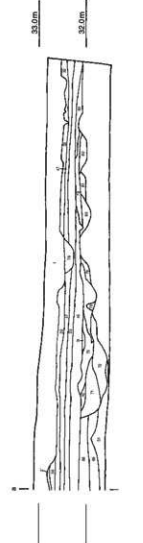
東 壁



南 壁



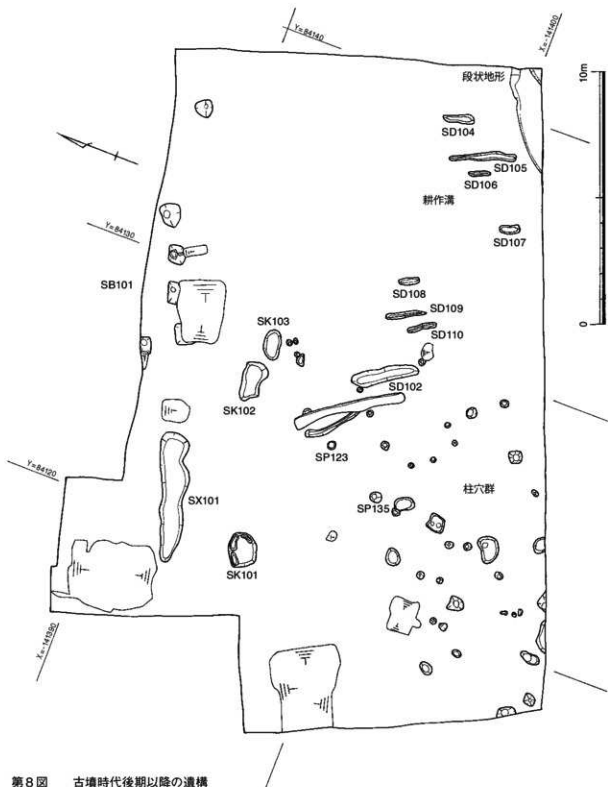
- | | | |
|------------|------------|-------------|
| 1 土曜子ノ方山頂 | 43 土曜子ノ方山頂 | 64 土曜子ノ方山頂 |
| 2 土曜子ノ方山頂 | 44 土曜子ノ方山頂 | 65 土曜子ノ方山頂 |
| 3 土曜子ノ方山頂 | 45 土曜子ノ方山頂 | 66 土曜子ノ方山頂 |
| 4 土曜子ノ方山頂 | 46 土曜子ノ方山頂 | 67 土曜子ノ方山頂 |
| 5 土曜子ノ方山頂 | 47 土曜子ノ方山頂 | 68 土曜子ノ方山頂 |
| 6 土曜子ノ方山頂 | 48 土曜子ノ方山頂 | 69 土曜子ノ方山頂 |
| 7 土曜子ノ方山頂 | 49 土曜子ノ方山頂 | 70 土曜子ノ方山頂 |
| 8 土曜子ノ方山頂 | 50 土曜子ノ方山頂 | 71 土曜子ノ方山頂 |
| 9 土曜子ノ方山頂 | 51 土曜子ノ方山頂 | 72 土曜子ノ方山頂 |
| 10 土曜子ノ方山頂 | 52 土曜子ノ方山頂 | 73 土曜子ノ方山頂 |
| 11 土曜子ノ方山頂 | 53 土曜子ノ方山頂 | 74 土曜子ノ方山頂 |
| 12 土曜子ノ方山頂 | 54 土曜子ノ方山頂 | 75 土曜子ノ方山頂 |
| 13 土曜子ノ方山頂 | 55 土曜子ノ方山頂 | 76 土曜子ノ方山頂 |
| 14 土曜子ノ方山頂 | 56 土曜子ノ方山頂 | 77 土曜子ノ方山頂 |
| 15 土曜子ノ方山頂 | 57 土曜子ノ方山頂 | 78 土曜子ノ方山頂 |
| 16 土曜子ノ方山頂 | 58 土曜子ノ方山頂 | 79 土曜子ノ方山頂 |
| 17 土曜子ノ方山頂 | 59 土曜子ノ方山頂 | 80 土曜子ノ方山頂 |
| 18 土曜子ノ方山頂 | 60 土曜子ノ方山頂 | 81 土曜子ノ方山頂 |
| 19 土曜子ノ方山頂 | 61 土曜子ノ方山頂 | 82 土曜子ノ方山頂 |
| 20 土曜子ノ方山頂 | 62 土曜子ノ方山頂 | 83 土曜子ノ方山頂 |
| 21 土曜子ノ方山頂 | 63 土曜子ノ方山頂 | 84 土曜子ノ方山頂 |
| 22 土曜子ノ方山頂 | 64 土曜子ノ方山頂 | 85 土曜子ノ方山頂 |
| 23 土曜子ノ方山頂 | 65 土曜子ノ方山頂 | 86 土曜子ノ方山頂 |
| 24 土曜子ノ方山頂 | 66 土曜子ノ方山頂 | 87 土曜子ノ方山頂 |
| 25 土曜子ノ方山頂 | 67 土曜子ノ方山頂 | 88 土曜子ノ方山頂 |
| 26 土曜子ノ方山頂 | 68 土曜子ノ方山頂 | 89 土曜子ノ方山頂 |
| 27 土曜子ノ方山頂 | 69 土曜子ノ方山頂 | 90 土曜子ノ方山頂 |
| 28 土曜子ノ方山頂 | 70 土曜子ノ方山頂 | 91 土曜子ノ方山頂 |
| 29 土曜子ノ方山頂 | 71 土曜子ノ方山頂 | 92 土曜子ノ方山頂 |
| 30 土曜子ノ方山頂 | 72 土曜子ノ方山頂 | 93 土曜子ノ方山頂 |
| 31 土曜子ノ方山頂 | 73 土曜子ノ方山頂 | 94 土曜子ノ方山頂 |
| 32 土曜子ノ方山頂 | 74 土曜子ノ方山頂 | 95 土曜子ノ方山頂 |
| 33 土曜子ノ方山頂 | 75 土曜子ノ方山頂 | 96 土曜子ノ方山頂 |
| 34 土曜子ノ方山頂 | 76 土曜子ノ方山頂 | 97 土曜子ノ方山頂 |
| 35 土曜子ノ方山頂 | 77 土曜子ノ方山頂 | 98 土曜子ノ方山頂 |
| 36 土曜子ノ方山頂 | 78 土曜子ノ方山頂 | 99 土曜子ノ方山頂 |
| 37 土曜子ノ方山頂 | 79 土曜子ノ方山頂 | 100 土曜子ノ方山頂 |
| 38 土曜子ノ方山頂 | 80 土曜子ノ方山頂 | |
| 39 土曜子ノ方山頂 | 81 土曜子ノ方山頂 | |
| 40 土曜子ノ方山頂 | 82 土曜子ノ方山頂 | |
| 41 土曜子ノ方山頂 | 83 土曜子ノ方山頂 | |
| 42 土曜子ノ方山頂 | 84 土曜子ノ方山頂 | |



第7図 東・南壁断面図

第2節 古墳時代後期以降

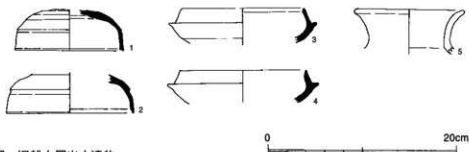
遺構の検出数は少なく、特に北半部は後世の耕作により削平され、残存状況は悪い。直上の旧耕作土からは、TK23～TK10型式期の遺物が少量出土したが、耕作により古墳時代の遺物包含層や遺構が攪乱され、混入した資料と考えられる。掘立柱建物1棟と土坑3基、柱穴20基以上、溝2条、耕作に伴う溝8条、段状地形を確認した。層位的に古墳時代後期以降の遺構であるが、出土した遺物は僅少であり、時期は不明である。



第8図 古墳時代後期以降の遺構

旧耕土層

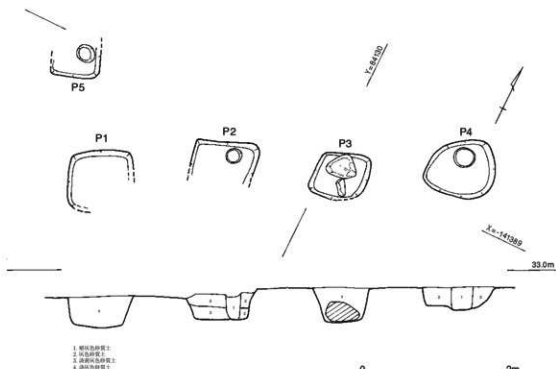
遺構検出面直上の旧耕土層から、古墳時代中期後半から後期の遺物が少量出土した。1・2は須恵器坏蓋である。1の天井部は高く、稜は明瞭である。2の口縁部は外方に広がり、稜は鈍い。3・4は須恵器坏身である。口径が大きく、短い口縁部が内傾して立ち上がる。5は土師器壺である。口縁部は外反し、端部は丸く取める。1はTK23・47型式期、2～4はMT15～TK10型式期の資料と考えられる。



第9図 旧耕土層出土遺物

SD101

3区北西部で検出した掘立柱建物である。調査区北端部で検出されたため、全体の規模は不明であるが、東西3間以上、南北1間以上の規模である。検出された5基の柱穴のうち、残存状況の良好な4基の柱穴の掘形は方形であり、1辺約65～90cm、深さ約20～45cmを測る。柱間距離は、2間分(P2-P4)の距離が310cmである事から、約155cmと推測できる。P1・P3は柱痕が検出されず、柱を抜き取る際に攪乱されたと考えられる。P3は柱を抜き取った後、1辺30～40cmの自然石を埋め込んだ状態で検出された。いずれの柱穴から出土した遺物は僅少で、時期は特定できない。



第10図 SB101平・断面図

SD102・104～110

2区及び4区の遺物包含層上面で検出した溝状の遺構であり、溝底で耕起痕が確認された。幅約20～40cm、深さ2～3cmを測り、溝の方向はN21°WからN33°Wである。畝立てに伴う溝であれば、耕作面の傾斜方向に対して平行または直行して設けられるため、耕作当時の地表の傾斜方向を示している可能性がある。

段状地形

4区南東部で、北西から南東へ落ちる段状の地形を検出した。調査区南端部で検出されたため詳細は不明であるが、調査区東壁の観察により、30cm以上の比高差を確認した。北側と南側の耕作面を区画する畦畔の痕跡の可能性はある。

SX101

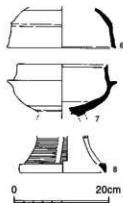
1区中央部で検出した不定形の遺構である。長辺約5.1m、短辺約0.8～1.1m、深さ約10cmを測る。古墳時代の遺物が混在して出土した。8は須恵器高坏脚部である。短い脚部の外面にカキメを施し、四方に方形の透しを穿つ。TK208型式期の資料である。

SK101～103

1区で3基の土坑を検出したが、出土遺物は細片であり、時期は不明である。

その他

2区および4区で多数の柱穴を検出した。出土遺物は細片が多く、図化できたのは2点である。古墳時代中期後半から後期の遺構を含んでいると考えられるが、埋土は数種類確認され、複数の時期の遺構が混在していると考えられる。建物としてのまともな確認できなかった。6はSP123から出土した須恵器坏蓋である。口縁部はわずかに外方に開く。7はSP135から出土した須恵器高坏である。口縁部はわずかに内傾し直線的に伸びる。受け部は水平方向に伸び、上面は平坦である。透かしの形状と数は不明である。TK23・47型式期の資料である。



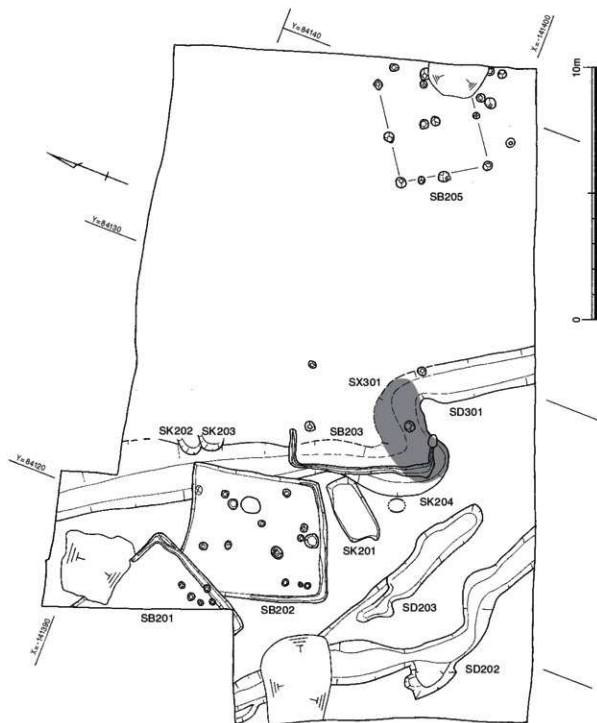
第11図 遺構出土遺物実測図



第12図 2区柱穴群

第3節 古墳時代中期後半から後期

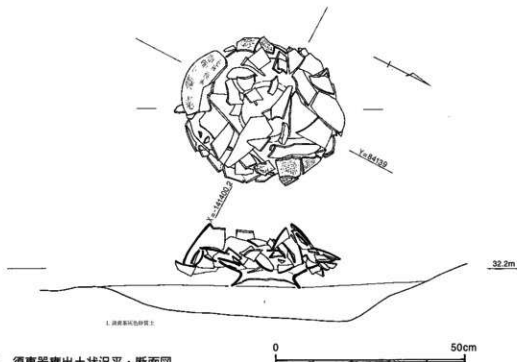
当調査の出土遺物の大半を占めるのは、TK23～MT15型式期の資料である。一部で遺物包含層が残存しており、掘立柱建物1棟の他に、竪穴建物3棟、土坑3基、自然流路を3条確認した。層位的に古墳時代の遺構として確認できたのは、掘立柱建物SB205のみであり、他の遺構に関しては、遺構埋土内の出土遺物から判断した。



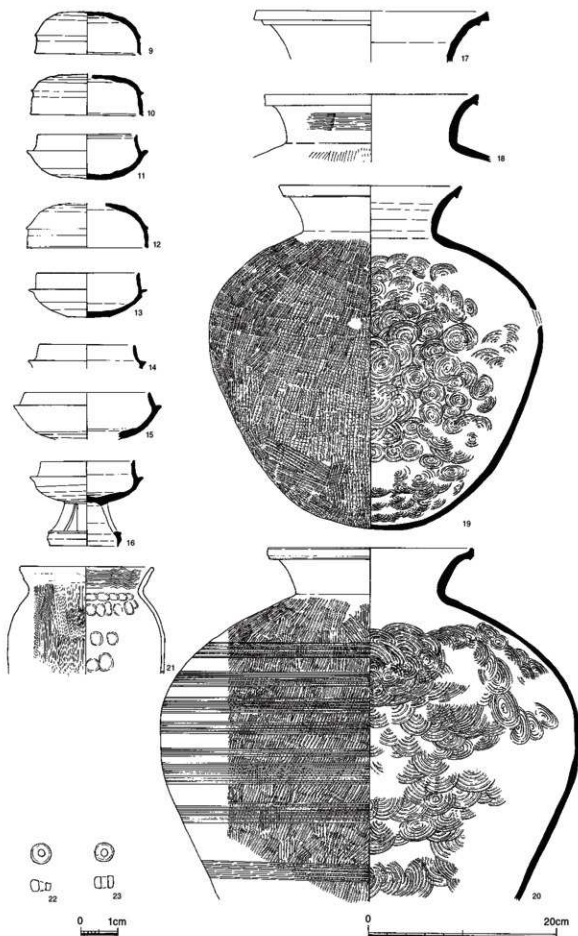
第13図 古墳時代中期後半から後期の遺構

遺物包含層

3区で堅穴建物状のプランを検出中に、古墳時代中期後半から後期の遺物が数点出土した(9~11)。当初古墳時代の堅穴建物と考えていたが、床面で弥生時代後期の遺物を確認したため、これらの遺物は、遺構とは無関係であることが判明した。9・10は須恵器坏蓋、11は須恵器坏身である。TK23・47型式期の資料である。12は須恵器坏蓋である。口縁部は垂直に立ち上がり、稜は低く天井部は高い。13~15は須恵器坏身である。13の口縁部は直線的に上方に伸び、受け部は水平方向に張り出す。14・15は口縁部が内傾し、MT15~TK10型式期の資料である。16は有蓋高坏である。口縁部は上方に立ち上がり、受け部は水平方向に張り出す。脚部に3方向の三角形の透かしを穿ち、脚端部は強くつまんで成形している。17~20は須恵器甕である。17は口縁端部下方に断面三角形のシャープな稜を巡らし、18~20より先行する特徴を持ち、TK208型式期の資料である。19は、SB205の南側に近接した場所で、伏せられた状態で検出された須恵器甕である。胴部最大径部がやや上方にあり、口縁部は外反して上外方に広がる。端部は下方に肥厚し、断面三角形を呈する。胴部外面はタキの方向を違えて施し、格子状の打痕を残す。内面は同心円状の当具の痕跡が残る。胴部最大径部のやや上方に、外部からの打撃による穿孔が認められる。TK23・47型式期の資料と考えられ、北側に隣接する第17次調査区でも、TK208~TK47型式期に併行する須恵器甕が、流路2(今回の調査で検出したSD301と同一流路)の肩部で破砕された状態で検出されており、出土状況に共通性がある。20の口縁端部は、直線的に外折し、端部内面は強いナデにより内湾して、さらに外方に伸びる。端部外面はわずかに膨らみを持ち、下端に1条の沈線を施す。胴部外面は縦方向のタキで成型した後、カキメを施す。内面は同心円状の当具の痕跡が残る。21は土師器甕である。胴部は長胴化しており、口縁部は直線的に外折している。胴部外面はタテハケ、内面は指オサエ、口縁部内面はヨコハケで、一部を波状に施文している。22・23は4区西半部で出土した滑石製白玉である。22は直径5.2mm、高さ3.1mm、23は直径5.3mm、高さ3.4mmを測る。



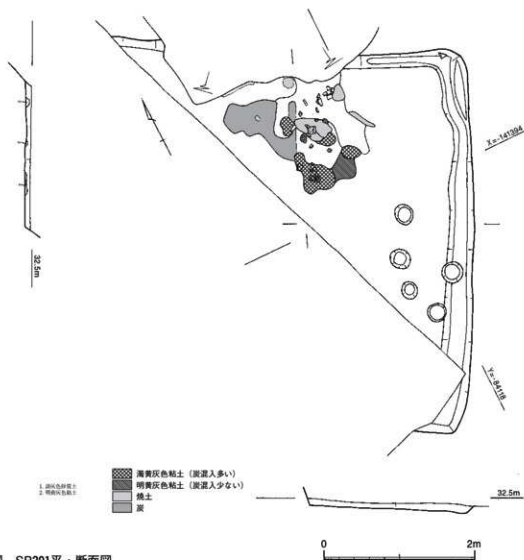
第14図 須恵器甕出土状況平・断面図



第15図 古墳時代後期遺構面・包含層出土遺物実測図

SB201

Ⅰ区北西部で検出した竪穴建物で、遺構の切り合い関係から、SB202より後出する。北側は擾乱を受けており、南西部は調査区外であるため、全容は不明である。平面形は、東西4.8m以上、南北5.0mの方形である。建物内からは柱穴5基、周壁溝、焼土、炭等を検出した。柱穴は検出位置から主柱穴とは考えられない。周壁溝は、北側中央部を除き、検出された全ての壁際に廻っている。幅20～30cm、床面からの深さは3～9cmである。北側壁中央部付近で、焼土、灰色の粘土塊、炭の広がりを検出した。床面の一部と粘土塊の一部に被熱痕が確認できる。炭は粘土塊西側の床面直上に広がっており、火を使用した痕跡を示す。これらはカマドの痕跡である可能性があるが、粘土塊は床面から遊離した状態で検出しており、原位置を保っていない事、炭の分布範囲が通常のカマドとは異なる事から、確定できない。周辺からは、MT15～TK43型式に併行する遺物が少量出土している。

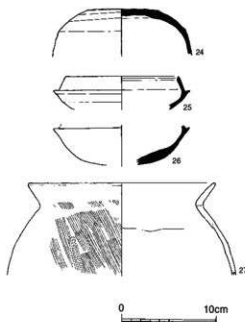


第16図 SB201平・断面図

24は床面直上から出土した須恵器坏蓋である。肩部の稜は不明瞭である。MT15~TK10型式期の資料と考えられる。25は須恵器坏身である。立ち上がりは内傾して直線的に伸びる。MT15型式期の資料と考えられる。26は須恵器坏身の形態を持つが、還元焼成されていない。器表面の残存状況は悪いが、ロクロを使用して成形されている。口縁端部を欠くが、立ち上がり部は短く、TK43型式に併行する資料と考えられる。27は土師器甕である。胴部の肩部は丸く、口縁部は強く外折し直線的に伸びる。口縁端部は丸い。胴部外面はタテハケを施す。



第17図 SB201焼土・炭出土状況



第18図 SB201出土遺物実測図

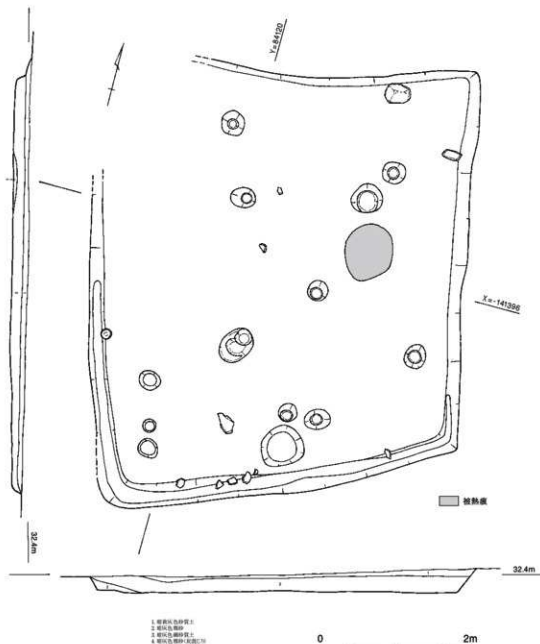
SB202

1区南半部で検出した竪穴建物である。遺構の切り合い関係から、SD301(上層)埋没後に建てられ、SB201に先行する。平面形は東西約5m、南北約5.7mの方形と考えられるが、東壁の残存状況が悪く、支柱穴と考えられる4本の柱の配置からも、東壁が東側に若干広がる可能性がある。建物内から、柱穴13基、周壁溝、土坑1基、床面の被熱痕を検出した。周壁溝は、西壁と南壁部分で検出した。幅20~30cm、床面からの深さは4cmを測る。床面の被熱痕は、建物中央より東側に寄った位置で検出した。長径75cm、短径60cmを測り、平面的に被熱していることや、周辺の床面が後世に削平された痕跡が無い事から、土坑状の遺構ではなく、直接床面で火を使用したと考えられる。周壁溝内より、完形の須恵器坏蓋を含む遺物が出土している。

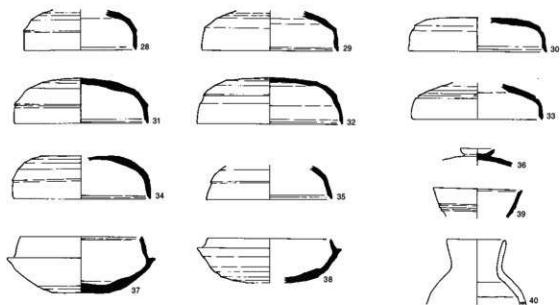
28~35は須恵器坏蓋である。31は完形で、西側周壁溝上層より天地を逆にした状態で出土した。口縁部は垂直に短く伸び、端部は浅い段を持つ。天井部内面に同心円の当具の痕跡が残る。32は南側周壁溝上層より出土した。口縁部は外方に広がり、不明瞭な稜を持つ。36は有蓋高坏の蓋のつまみ部である。37・38は、須恵器坏身である。37は南側周壁溝の東側上層より出土した。口縁部は内傾して直線的に立ち上がり、SB202出土遺物では古相を呈している。38は、住居内埋土の最上層から出土した。短い口縁部が内傾して立ち上がる。39は壺または甕の口縁部である。口頸部はやや内湾気味に外方に開き、2条の沈線を巡らした箇所、直線的な口縁部がやや内折して伸びる。全体の調整はシャープである。40はSB202の東側周壁溝南端部に隣

接する土坑 (SK02) から出土した土師器壺である。口縁部は直線的に外方に伸び、肩部は半球状である。41は棒状土錘である。42は砂岩製の砥石である。片面のみに平滑面が確認できる。43はSB202の北側に隣接した窪みで検出した滑石製白玉である。直径5.2cm、高さ3.4mmを測る。不明瞭な稜を持ち、断面は算盤球状を呈する。建物との関連は不明である。

床面直上の遺物は細片で時期を確定し難いが、埋土から出土した遺物の時期はTK23～MT15型式期に取りまり、廃絶した時期はMT15型式期と考えられる。建物はSD301が洪水で埋没した後に建てられており、SD301上層の埋没時がTK23・47型式に併行する時期である事から、洪水直後にSB202が建てられていると考えられる。北側に隣接する第17次調査区でも、SD301と同一の流路が埋まった段階で竪穴建物が建てられていることが確認されている。



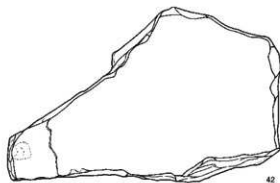
第19図 SB202平・断面図



00



41



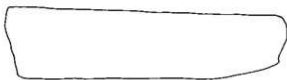
42



00

00

43



0 1cm

0 20cm

第20図 SB202出土遺物実測図



44



45



46

0 10cm

00



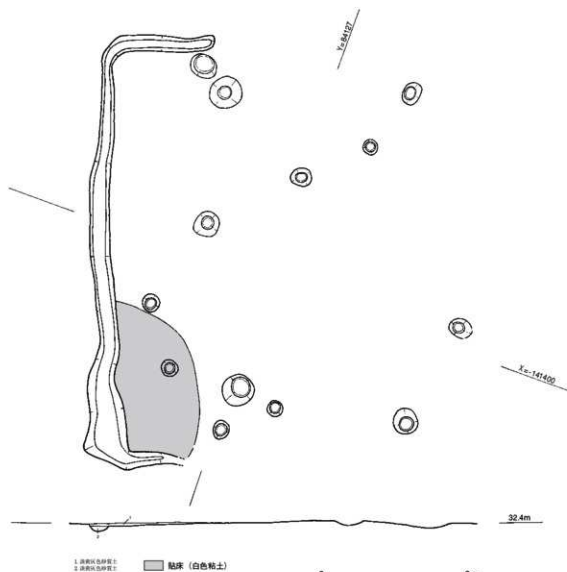
47

第21図 SB203出土遺物実測図

SB203

2区東半部で検出した竪穴建物である。遺構の切り合い関係から、SD301（上層）埋没後に建てられている。後世の削平の影響を受け、西側周壁溝の一部と柱穴数基以外は残存していないため、全容は不明である。平面形は南北5.5mの方形と考えられる。周壁溝の規模は、幅12～22cm、深さ6～9cmである。周壁溝埋土より、須恵器坏蓋、高坏、壺口縁部、土錘等が出土した。

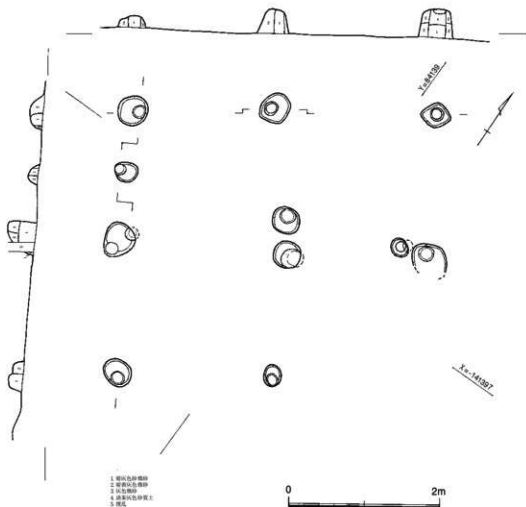
44は須恵器坏蓋である。口縁部はわずかに外方に開き、肩部に不明瞭な稜を持つ。天井部の回転ヘラ削りの範囲が狭く、MT15型式期の資料と考えられる。45は床面直上から出土した須恵器高坏である。脚部は方形の三方の透しを持つ。TK23・47型式期の資料である。46は須恵器壺の口縁部である。口縁端部は面を持ち、外方やや下った箇所に沈線と垂下する丸い突起を巡らす。その下方に波状文を巡らす。TK23・47型式期の資料である。47は完形の棒状土錘である。全長6.9cm、最大幅1.5cm、重量15.6gである。



第22図 SB203平・断面図

SB205

4区南東部で検出した東西2間以上、南北2間の総柱の掘立柱建物である。南東方向へ傾斜を強める地形に立地しており、建物を構成する柱列は、傾斜方向に直行または平行している。南北の柱列の方向はN33°Wである。柱掘形はすべて円形で、直径25～45cm、深さ15～40cm、柱痕の直径は15～20cmである。柱間は芯々で180～185cmである。柱痕の基部が北東方向に移動している柱穴があり、柱を抜き取る際または建物が倒壊した際に、柱が南西方向に傾いた状況が想定できる。柱穴埋土からは、古墳時代の須恵器と土師器の細片が少量出土しており、TK23～MT15型式期の遺構と考えられる。



第23図 SB205平・断面図

SK201

SB202の南東コーナーに隣接して、長辺約260cm、短辺約130cm、深さ25～30cmの長方形の土坑を検出した。SB202と同様、SD301上層が埋没した後に掘削されている。

SK202・203

1区中央部で検出した土坑で、遺構の切り合い関係から、SD301(上層)埋没後に掘削され、SK202よりSK203が後出する。北東部は攪乱されており全体の形状は不明である。SK202の形状は、長径100cm程度の楕円形と考えられるが、詳細は不明である。埋土内より、長辺10～

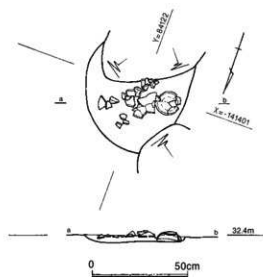
20cmの自然礫が数点まとめて出土した。SK203はSK202と同様の規模、形状と考えられる。SK203の埋土より、長辺70cm、短辺20～30cmの板状の自然石が1点出土している。51は須恵器甕の口頸部で、口縁端部は失われている。直線的な口縁部が上方外に伸び、口縁端部近くの外面に2条のシャープな稜を巡らし、稜と頸部の間に波状文を2周廻らす。TK208型式期の資料と考えられる。52は土師器壺の口縁部である。口縁部は外折して直線的に伸び、頸部内外面の屈曲線は明瞭である。口縁端部は内面にわずかに球状に肥厚する。調整は不明である。

SK204

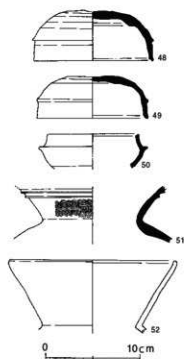
SB203の西側に近接した場所で検出した土坑である。攪乱と後世の削平により、形状と規模は不明であるが、直径55cm程度の円形の土坑と考えられ、深さは5cmを測る。須恵器坏蓋と土師器甕が出土した。SD301(上層)が埋没した後に掘削されており、出土状況から人為的に遺物が埋置されている事から、SB203と同時期に存在した遺構と考えられるが、SB203との関連は不明である。49は完形の須恵器坏蓋である。正置状態で出土した。天井部が高く、鈍い稜を巡らし口縁部はわずかに開く。TK23・47型式期の資料である。土師器甕は残存状況が悪く、図化はできなかった。

その他の遺構出土遺物

48は4区のSK205から出土した須恵器坏蓋である。天井部が高く、回転ヘラ削りの範囲が広い。当調査で出土した坏蓋では、最も厚い器壁を持つ。はTK23・47型式期の資料である。50は4区の須恵器坏身である。立ち上がり部は外反気味に内折し、端部は浅い段を持つ。TK23・47型式期の資料である。



第24図 SK204平・断面図



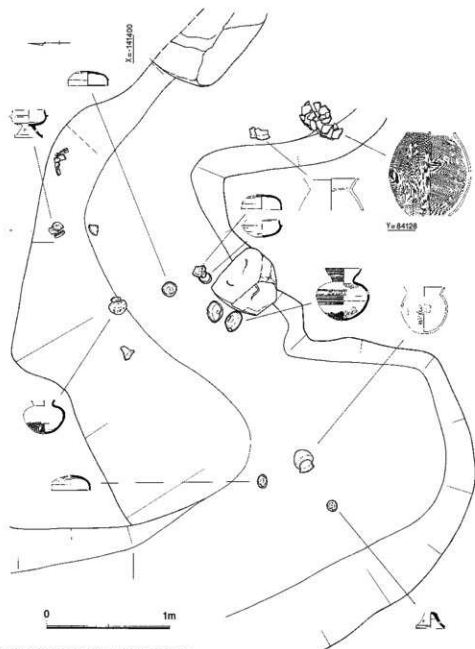
第25図 遺構出土遺物実測図

自然流路

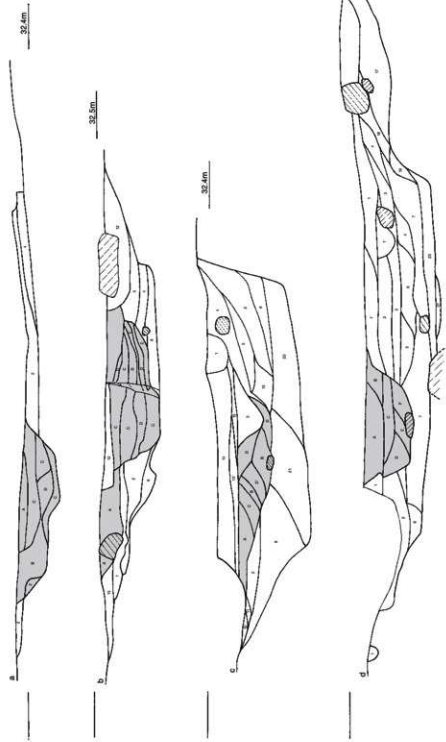
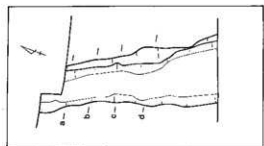
1・2区で、北西から南東へ流下する自然流路を3条検出した。埋土は、いずれも洪水性の粗砂・砂礫を主体とする。

SD301 (上層)

古墳時代中期後半の洪水が、弥生時代後期末に埋没したSD301の埋土を削り込んで堆積した状況を確認した。2区南半部で東に強く蛇行し、さらに南東方向へ流れている。堆積層は1～30cm大の砂礫を主体とし、幅2.2～3.3m、深さ約0.5mを測る。短時間で堆積した状況が窺え、TK23・47型式期の須恵器を主体とする遺物が大量に出土した。完形の遺物は、蛇行地点から南東側の最上層に集中している。



第26図 SD301内SX301遺物出土状況平面図



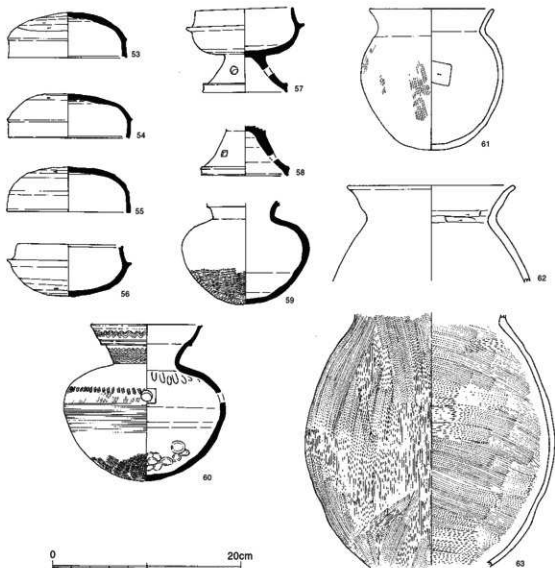
1. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 2. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 3. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 4. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 5. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 6. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 7. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 8. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 9. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 10. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 11. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 12. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 13. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 14. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 15. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 16. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 17. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 18. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 19. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 20. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 21. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 22. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 23. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 24. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 25. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 26. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 27. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 28. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 29. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 30. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 31. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 32. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 33. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 34. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 35. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 36. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 37. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 38. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 39. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 40. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 41. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 42. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 43. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 44. 第四系全新统冲积层 (Q4)
 45. 第四系全新统冲积层 (Q4)



第27图 SD301断面图

SD301内SX301

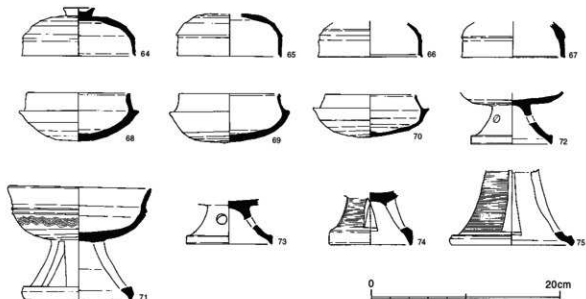
SD301(上層)の南端部の最終埋土から、遺物が集中して出土した。TK23・47型式期を主体とする完形品が多く、流路埋没後に人為的に投棄された可能性がある。53~55は須恵器坏蓋である。56は須恵器坏身である、口縁部は内傾して直線的に伸びる。57・58は須恵器高坏である。57は坏部が深く、古相を示す。脚部に円形の透しを三方向に施す。58は脚部に正方形の透しを三方向に施す。59は須恵器壺である。胴部最大径部はやや上方にあり、下半部はタタキを施す。口頸部は外反して上方に伸び、口縁部との屈曲部以上は失われている。60は須恵器甕である。口頸部はやや外反気味に立ち上がり、口縁部との境に稜を巡らし、内湾ぎみに外方に立ち上がる。稜の上下に波状文を巡らす。胴部は扁球状を呈し、最大径部はやや上方にある。胴部全体をタタキで成型した後、肩部に不連続の波状文、最大径部下方にカキメを施す。61~63は土師器甕である。61はほぼ球形の胴部にやや外反する口縁部を外折する。



第28図 SD301内SX301出土遺物実測図

口縁端部は丸い。胴部外面はタテハケ、内面に板ナデの痕跡が残る。62はわずかに外反する口縁部が外折し、端部は丸い。頸部内面に板ナデの痕跡が残る。63はやや長胴化しており、外面はタテハケ、内面はヨコハケを施す。

64～75はSD301内SX301以外の地点で出土したSD301上層出土遺物である。TK23・47型式期を主体とする。64は須恵器有蓋高坏の蓋である。天井部に輪状のつまみを持つ。65～67は須恵器坏蓋である。67の天井部の器壁は厚く、他の坏蓋の形状とは異なる。調整も甘い。68～70は須恵器坏身である。71は無蓋高坏で、坏部と口縁部の境に2条の稜を巡らす。稜の下部は波状文を巡らし、脚部は3方向に三角形の透かしを施す。72～75は須恵器高坏の脚部である。72・73は3方向に円形の透かしを施し、74・75は脚部外面にカキメを施した後、3方向に三角形の透かしを施す。75は長脚化しており、新相を呈している。



第29図 SD301上層出土遺物実測図

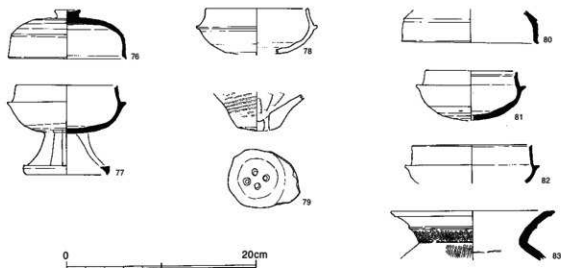
SD202

2区西半部で検出した自然流路で、幅1.5～2.0m、深さ約25～35cmを測る。TK208～MT15型式期の須恵器坏蓋、坏身、甕等が出土した。76は須恵器有蓋高坏の蓋である。頂部が凹んだつまみを持つ。77は須恵器有蓋高坏である。直線的な口縁部が内折して内上方に伸びる。脚部は3方向に方形の透かしを持つ。78の形状は須恵器坏身であるが、還元焼成されていない。79は弥生土器鉢である。底部に4か所の穿孔を持つ。外面はタタキ、内面に板ナデを施す。弥生時代後期の資料である。80は須恵器坏蓋である。81・82は須恵器坏身である。81の体部は深い。82の立ち上がりはやや内傾して直線的に立ち上がる。83は須恵器甕である。口縁端部は斜め上方につまみあげ、水平方向にも面を持つ。口頸部の中央部に稜線を巡らし、その下方に波状文を施す。胴部は縦方向のタタキを施す。82・83は古相を呈す。

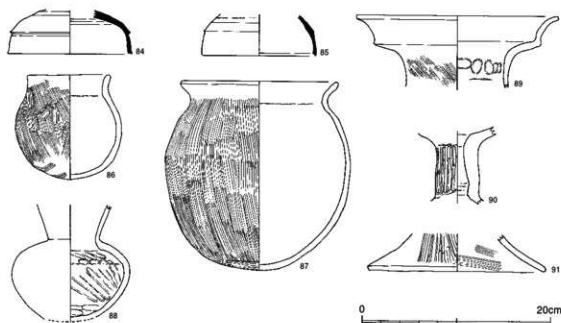
SD203

SD202の東側で、自然流路の一部を検出した。幅1.0～1.5m、深さ約15～20cmを測る。TK23・47型式に併行する時期の資料が出土した。84・85は須恵器坏蓋である。84の稜は明瞭であるが、85は形骸化している。86・87は土師器甕である。86は球状の体部に、短い口縁部が

わずかに外反する。胴部外面はタテハケを施す。87は球状の体部に強く外反する口縁部が取り付く。胴部外面はタテハケを施す。88・89は土師器壺である。88は最大径部がやや上方にある扁球状の胴部に、直線的な頸部が外折して伸びる。外面の調整は失われているが、内面はユビナデで成形している。89は直立する頸部が上部で強く外反し、さらに二重口縁部が強く外反して取り付く。頸部外面はナナメ方向のハケを施す。90は土師器台の柱状部である。円柱状を呈し、外面はヘラミガキを施す。91は土師器高坏または器台脚部の下半部である。わずかに外反して強く開き、外面はヘラミガキ、内面は横方向のハケを施す。



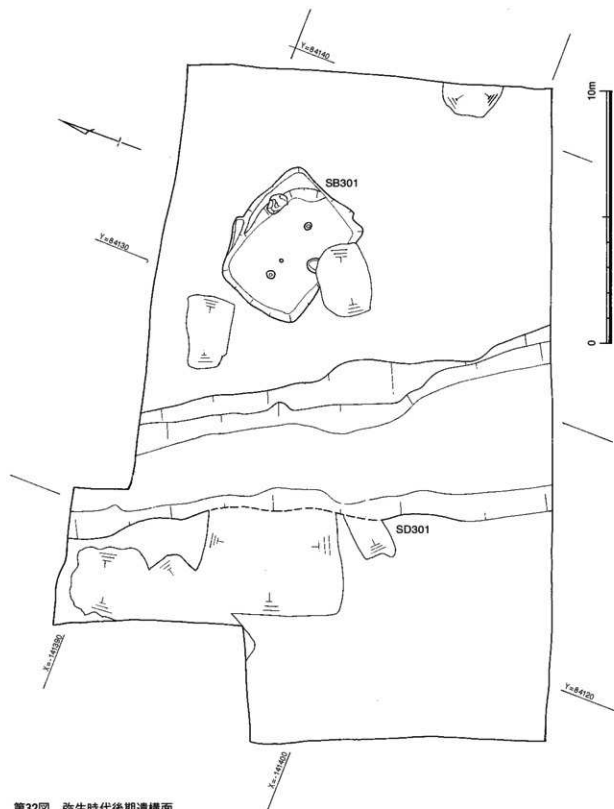
第30図 SD202出土遺物実測図



第31図 SD203出土遺物実測図

第4節 弥生時代後期

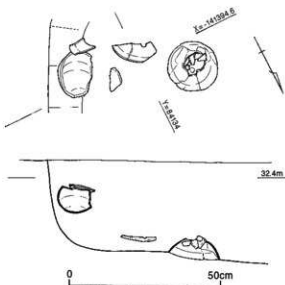
竪穴建物 (SB301) 1棟と自然流路 (SD301下層) 1条を検出した。当時期の遺物包含層は残存せず、遺構埋土以外からの遺物の出土は僅少であった事から、本来の生活面は古墳時代後期に削平されていると考えられる。北側に隣接する第17次調査でも、SD301と接続する流路と集石墓が検出されており、居住域と墓域が近接していることを確認した。



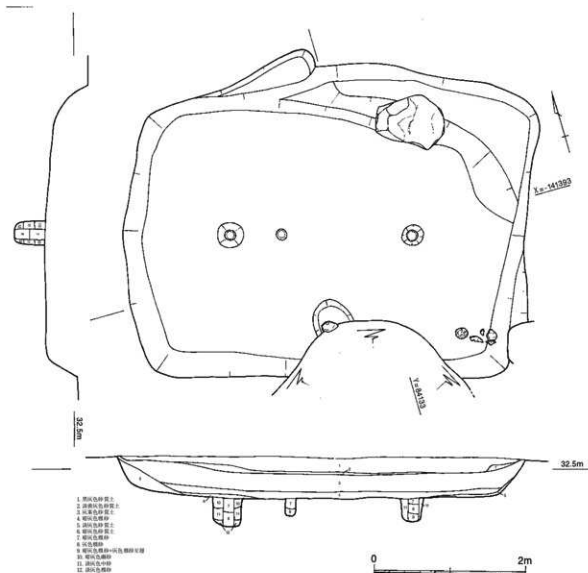
第32図 弥生時代後期遺構面

SB301

3区で検出した堅穴建物である。南側の一部が攪乱されているが、長辺約5.3m、短辺約4.2mの長方形である。北壁のやや東寄り、長辺90cm程度の自然石を検出した。下層の土石流による転石であり、撤去せずに建物内に取り込んでいる。南東コーナー部でも、同様の自然石を検出した。床面より、主柱穴2基、土坑1基、ピット1箇所を検出した。主柱穴は直径30~40cm、深さ約30~40cmである。土坑は建物の中心から南壁側に寄った位置にあり、南半分部分が攪乱されている。平面形は、長径約55cmの円または楕円形と考えられ、深さ約30cmを測り、被熱痕はない。

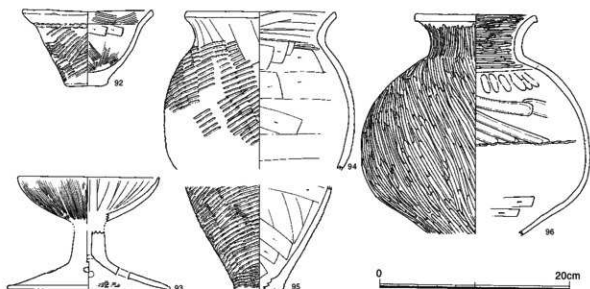


第333図 SB301遺物出土状況



第334図 SB301平・断面図

92は南壁の西端付近で検出された小型の鉢である。わずかに内湾して外方に伸びる体部に、直線的な口縁部が外折して伸びる。体部外面はタタキ、内面はハケ又は板ナデ、口縁部内面はヨコハケを施す。外面の外折部はユビオサエが明瞭に残る。93は南壁の東端部で出土した高坏である。坏部は床面に接して出土した。やや扁平な半球状の坏部に円筒状の柱状部が取り付け、脚部は強く外折して直線的に開き、4方に円形の透かしを穿つ。坏部の外面はタテハケ、内面は板ナデを施す。94・95は甕である。94の口縁部は緩く外反し、端部は上方につまみあげ、外面に面を持つ。94・95共に胴部外面はタタキ、内面は板ナデにより成形している。96は壺である。口縁部は外反して上外方に伸び、端部は面を持つ。胴部外面は左上がりのヘラミガキ、内面下部は板ナデ、上半部はナデで成形する。口縁部外面は縦方向、内面は横方向のヘラミガキを施す。いずれも弥生時代後期後半の資料と考えられる。



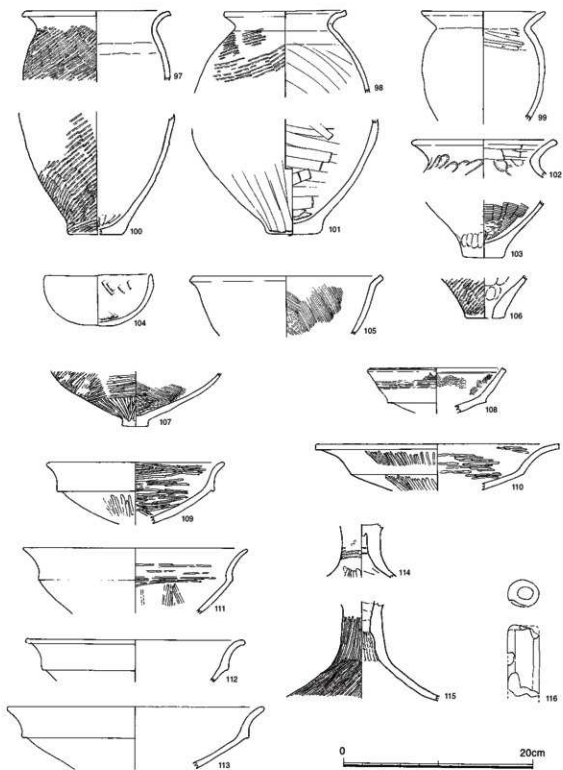
第35図 SB301出土遺物実測図

SD301 (下層)

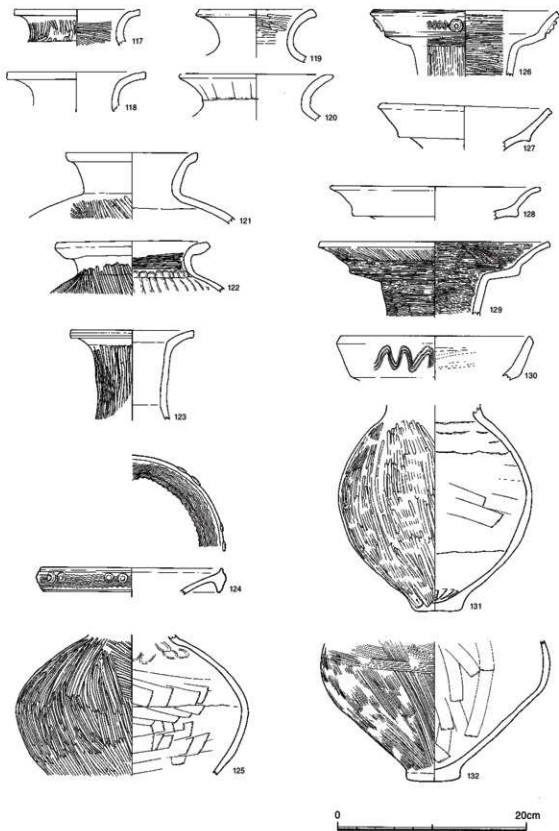
1・2区で検出した自然流路である。幅約4.2～6.3m、深さ約1.1mを測り、北西方向から南東方向に直線的に流れる。北側に隣接する調査地点(第17次調査地点)で検出された流路2と同一の流路であり、弥生時代後期後半に埋没した状況を追認した。埋土は粘質が強く、流速が遅い状態で堆積しており、上層の古墳時代の堆積とは対照的である。遺物は溝の東側の肩部と底部付近を中心に出土した。

97～102は甕である。97の口縁部は外反し、口縁端部は面を持つ。97・98の胴部外面は右上がりのタタキを施す。98は球形の胴部に口縁部が強く外反する。端部は上方に摘み上げる。胴部外面は緩い右上がりのタタキを施し、内面は板ナデで成形している。99の口縁部は強く外折し、頸部内面の屈曲部に稜を持つ。100の底部内面は板ナデの痕跡が残る。101の胴部外面は縦方向の板ナデ、内面は横方向の板ナデで調整している。102の口縁部は強く外折して直線的に伸びる。胴部内面は板ナデで調整している。103～106は鉢である。103は底部である。体部は外方に直線的に伸び、内面はヨコハケで調整している。104は半球状の体部を持つ。105は半球状の体部に、短い口縁部が外折する。内面はタテハケを施す。106は底部穿孔の底部であ

る。外面は右上がりのタタキ、内面は指オサエで成形している。107は鉢または壺の体部下半部である。底部径は2.8cmと小さい。体部は強く広がり、外面はヘラミガキ、内面はハケを施す。108~115は高坏である。108は浅い坏体部に直線的に伸びる口縁部が内折する。口縁端部は面を持ち、1条の沈線を巡らす。口縁部外面にクシ描きの直線文と上方に波状文を巡らす、内面は稚拙な波状文と不規則なクシ描き文を施す。109~113は坏体部高と坏口縁部高が同程度、又は坏体部高が高いが、110は坏口縁部高が高く、口縁部の外反も強い。器表面の調整は、109・110の外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキを施す。111の坏体部内面は縦方向、坏口縁部内面は横方向のヘラミガキを施す。110・111は、坏体部と坏口縁部の境の内面に明瞭な屈折線を持つが、109・112・113の内面は、なだらかに成形している。114・115は脚部である。114の外面にタタキの痕跡が残り、下部は縦方向のヘラミガキを施す。内面は竹管状の工具による成形痕が残り、下部は板ナデを施す。115は円柱状の柱状部に、直線的に開く脚部が外折する。外面は縦方向のヘラミガキ、脚柱部内面はシボリの痕跡が残る。116は外径3.3cmの管状土錘である。117~132は壺である。117・118は口縁部が強く外反し、端部は面を持つ。117の外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のハケを施す。119・120は肩部から口縁部に至るまで緩やかに外反して口縁端部に至る。119の内面は横方向のヘラミガキ、口縁端部はやや肥厚し、丸みを帯びた面を持つ。120の口縁部外面は、縦方向の板ナデの痕跡が残る。口縁端部は上面に面を持つ。121は丸い肩部から口頸部が外折して直線的に伸び、口縁端部は外反し、外側に面を持つ。肩部外面に斜め方向のミガキを施す。122は丸い肩部から口頸部が内上方に立ち上がり、厚い口縁部が強く外反する。口縁部のヨコナデによる整形は行わず、厚さは不揃いである。肩部外面に斜め方向のヘラミガキ、頸部内面に横方向のヘラミガキを施す。123は長頸壺の口頸部である。直線的な頸部がやや外方に開いて伸び、口縁部は外反気味に強く外方に広がる。内面の屈曲線は明瞭である。口縁端部は面を持ち、2条の沈線を巡らす。頸部外面は縦方向のヘラミガキを施す。124は垂下口縁部の外面に波状文を巡らした後、8方向に2対の円形浮文を貼り付ける。波状文の上下に1条の沈線を巡らす。内面は波状文を2周巡らしている。125~129は二重口縁壺である。125はやや外方に開く頸部に口縁部が強く外折し、さらに二重口縁部が外反気味に上外方に立ち上がる。口縁端部は面を持ち、2条の沈線を巡らす。二重口縁部外面は波状文を巡らし、円形浮文を4方向に貼り付ける。波状文下方には、2条の沈線を巡らす。頸部外面は縦方向のヘラミガキ、口縁部外面は横方向のヘラミガキ、頸部から口縁端部に至る内面は、横方向のヘラミガキを施す。126は直線的に二重口縁部が外方に伸び、端部は面を持つ。127は水平方向まで強く開いた口縁部に、二重口縁部が外反する。128は直線的な頸部がやや外方に開いて立ち上がり、口縁部が水平方向まで強く外折し、さらに二重口縁部が外反気味に上外方に立ち上がる。口縁端部は面を持つ。二重口縁部外面の上半部は斜め方向のヘラミガキ、他の箇所は、内外面共に丁寧な横方向のヘラミガキを施す。129は厚い器壁を持つ二重口縁部で、外面に3条の波状文を施す。内面は横方向のヘラミガキを施す。130は扁球状の胴部で、外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向の板ナデを施す。131はやや縦方向に長い球状の胴部で、外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向の板ナデを施す。132は胴部の下半部で、底部から直線的に外方へ伸びる。外面は縦方向のハケを基本とし、最大径部は横方向のハケを施す。内面は縦方向の板ナデを施す。



第36図 SD301下層出土遺物実測図(1)



第37図 SD301下層出土遺物実測図(2)

第3章 自然科学的考察



第38图 下層土石流検出状況

第1節 神戸市東灘区郡家遺跡で観察された土石流堆積物

増田富士雄（京都市大学名誉教授）

はじめに

六甲山地の南側、大阪湾との間に広がる神戸の市街地は、狭い湾岸低地を除くとその大半が山麓斜面や扇状地や段丘といった地形上に立地している。それらの地形を構成する主体は、山地から流れ出る小河川からの土石流堆積物である。こうした土石流堆積物に関する地層学的な報告によって、随伴する堆積物の特徴、礫や流木の配列形式、その堆積過程などが明らかにされてきた（増田、1998、1999、2003、2010、2014、2016、2019；増田ほか2014）。また、この地域における土石流堆積物の堆積時期や変遷についての報告もなされている（六甲土石流団体研究グループ、2001）。

2019年1月と2月に、神戸市教育委員会が神戸市東灘区の住吉川扇状地上で発掘調査を行っていた「郡家遺跡」で、地層を観察する機会を得た。そこでは土石流が運んで来た径1mを越える花崗岩類の巨礫が、方向性をもって配列していた。その場所は扇状地の西縁部で、土石流が土砂を運んできて堆積させた舌状堆（堆積ロープ）の境界部にあたる。ここではその特徴的な堆積物の産状を報告する。

調査地の地形

調査地は、神戸市東灘区御影二丁目13番1の「郡家遺跡」である（第39図）。郡家遺跡は縄文時代早期以降の遺跡である（神戸市教育委員会、2011）。そこは六甲山から南流する住吉川の、右岸側の山麓扇状地上に位置する標高32.8~34.5mの地点にある。田中（2007）によれば、この扇状地はその分布高度の違いから約6つに地形区分されている（第39図）。それらは扇頂から広がる舌状（耳たぶ状）の複合堆積体（堆積ロープ群）を構成しており、調査地は田中（2007）による後氷期と現成との扇状地の境界部にあたる。こうした扇状地の堆積ロープ群は、大雨による洪水で発生した大規模な土石流が作り出した堆積地形が、次々に重なりあってできたものである。従って、河床低下に伴ってつくられる河岸段丘とは違った堆積過程であることを考えると、分布標高で区分した各ロープの形成年代については、再検討の余地が残されているといえる。



第39図 調査地の位置（二重丸地点）と住吉川扇状地の地形分類

地形分類は田中（2007）による。①は最終氷期以前、②は最終氷期前半、③は最終氷期後半、④は晩氷期、⑤は後氷期、⑥は現成の扇状地。国土地理院発行2.5万分の1地形図「西宮」に加筆。

地層区分

発掘過程で出現した土石流で運ばれてきたと考えられる巨礫は、ほぼ東西方向にその長軸を配置して定置していた(第40図A)。そこで地層断面の観察のためにトレンチを掘削した結果(第40図B)、さらに下位には径が1mを越えるような巨礫が多く含まれる砂礫層や礫層が存在し、そこに含まれる礫も同じ粒子配列を示すものが多いことがわかった。

地層断面の観察から、この地域の地表付近の地層は大きく6つ(第1層～第6層)に区分できる(第41図)。最上位の淘汰が悪く乱雑な構造を示す泥質の砂礫層(第1層)は、平成30年の既存建物の解体に伴う整地土である。第2層は、厚さ30～50cmの砂質泥層で、ほとんど遺物を含まない耕作土で、古墳時代後期以降の層である。第3層は厚さ20～40cmの黒色の泥炭質の砂質泥層で(第41図C)、凹みを埋めるように堆積した浅い水域、湿地の堆積物である。扇状地ではその末端で湧水することが一般的であり、この場がそうした湧水湿地の環境になっていたのである。含まれる遺物から古墳時代後期(5世紀後半～6世紀初頭)の層と考えられる。第4層は厚さ60cmほどの砂礫層と上部の砂質泥層で、その薄い層に長径1m以上にもなる花崗岩の巨礫を含んでいる(第41図B)。第40図Aや第41図Aの発掘面にみられる巨礫もこの層に含まれるものである。この巨礫は後述するように、下位の土石流礫層に由来したものである。第5層は厚さ1mほどの巨礫を含む礫層で、上方粗粒化を示す典型的な土石流堆積物である。この堆積物の特徴については後述する。第6層はその上部がわずかに認められるだけの礫層であるが、その岩相から第5層と同じ土石流堆積物であることがわかる。第4層以下の砂礫層や礫層の年代は不明であるが、隣接地域での調査結果からそれは弥生時代後期以前とされる。なお地層の年代については、調査員の山口英正氏(神戸市教育委員会)にご教示頂いた。

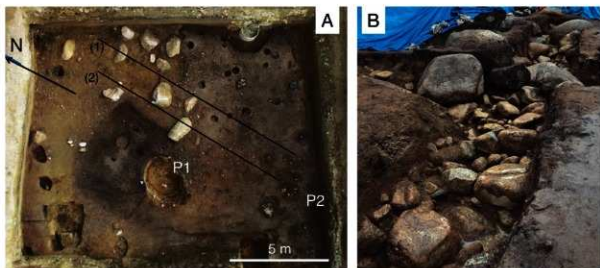
土石流堆積物

ここでは土砂流堆積物である第4層の砂礫層と、典型的な土石流堆積物である第5層の礫層について、その特徴を述べる。

典型的な土石流堆積物の岩相を示す第5層は、厚さ約1mで、淘汰(分級)が悪く、基質が泥質の礫支持礫層で、上部に巨礫、いわゆる“outsized clasts”を含む。層全体として最下部の砂層から礫層へと上方粗粒化を示す。第5層の上部は土壌化した砂質土となっていて、第4層との間にかなりの時間間隙があったことが予想される。

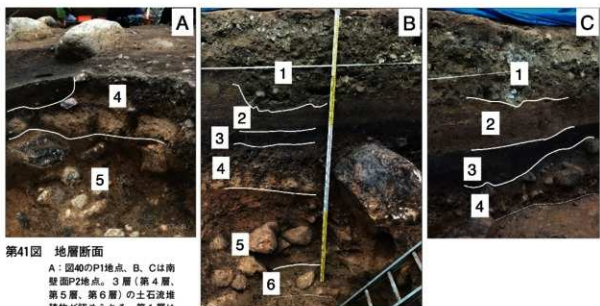
流れに多量の土砂を含んだ高濃度で高密度の土石流や、それより流れに含まれる土砂濃度が低い土砂流は、全体がひとつの集団として流動化し重力によって駆動し、斜面を流れ下る。こうした流れは重力流としてまとめられる。重力流はその駆動力である重力が、自身のもつ粘性や周囲との摩擦を下回ると、急に停止しそこに含有していた堆積物を沈積させる。その停止は流れの密度が大きいくほど急激で、あたかも流れが“凍結”したかのような振る舞いをする。重力流堆積物についての詳細な説明は、増田(2004、2005、2016)、成瀬ほか(2001)などを参照されたい。

第5層の断面には礫が上流に傾斜して次々に倒れて重なるインプリケーション構造(覆瓦構造)が発達する(第42図A)。その礫は長軸を流れに直交して配列したものが多く(第42図B)。この姿勢は粒子が底面を転がって移動する、転動から停止したことを示している。また、これとは違って礫の長軸を流れに平行にして堆積した粒子もみられる。これは礫が浮遊した状況からそのまま停止したことを物語っている。こうした礫の構造や配列は流れの停止とそこでの堆



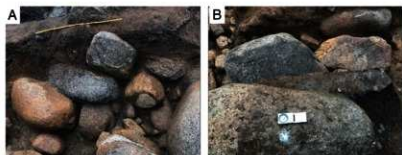
第40図 土石流礫の様子

A:発掘調査過程で露出した巨礫。(1)と(2)はその後に掘削したトレンチの東西壁の位置。P1、P2は地層断面の観察位置。
B:掘削したトレンチに出現した巨礫の様子。トレンチの南から北方向を写したものの。



第41図 地層断面

A:図40のP1地点、B、Cは南壁面P2地点。3層(第4層、第5層、第6層)の土石流堆積物が認められる。第1層は平成30年の既存建物解体時の整地土。第2層はほとんど遺物を含まない数層の耕作土層で隣接地の層序から推定すると14世紀初頭以降の層。第3層は古墳時代後期(5世紀後半～6世紀初頭)の遺物を含むする泥炭質の湿地堆積層。第4層～第6層は土砂流および土石流堆積物とその上面の土壌層。第4層に含まれる巨礫は第5層の上面のものが再移動したもので、第4層以下は弥生時代後期以前の堆積物。



第42図 土石流堆積物の巨礫の配列の様子

A:トレンチ断面(2)の第5層上部にみられる右側(上流)に傾斜したインプリケーション構造。礫の長軸が流れに平行したものと(浮遊からの停止)と、流れに直交したものと(転動からの停止)がみられる。スケールの折り尺は長さ1m。B:第4層と第5層上部にみられる流れに直交した巨礫の長軸配列。スケールのクリノコンパスは長さ17cm。

積が一連で急激だったことを示している。同様の土石流堆積物のインプリケーション構造や粒子配列は、すでに神戸の北青木遺跡(増田、1999)や雲井遺跡(増田、2010)、深江北町遺跡(増田、2014)などで報告されている。

今回の調査地が、住吉川扇状地に広がる舌状の土石流堆積体(堆積ローブ群)の西側の縁辺に位置することは、すでに述べた。この調査地のトレンチ断面では、土石流が停止した末端の様子を観察することができるのである(第43図)。トレンチの両側の壁面で、現地性と判断できる第5層の礫についてみかけの長軸を調べると、上流側ではインプリケーション構造が発達するのに対し、末端ではその上部が崩れ、前方の斜面を転がり落ちたと思われる礫配列を示している。すなわち、そこでは多くの礫が長軸を流れに直交して下流傾斜しているのがわかる。また一部の礫は長軸が流れに平行になっていることから、斜面を滑り落ちて(滑動)停止したと思われる。すなわち、土石流が急激に停止した部分では、流れの中の移動姿勢を多く残しているのに対し、最末端では下部や後方の部分が停止しても移動してきた慣性で上部が前方に崩れ、斜面上を礫が転がって堆積していったのである。そのことは地層の厚さが薄くなっていくということからもわかる(第43図)。土石流では先端の頭部が最も粒子密度が高く厚さも大きいことから、堆積時にその形態が壊れたことがわかる。この産状の解釈では、堆積物には運搬してきた流れの状況だけではなく、停止した後の情報をも記録している箇所があることを示し、堆積物から水理条件を推定することの難しさがわかる。

第5層の典型的な土石流堆積物と異なるのが、第4層の砂礫層(第41図)である。まず主体となる構成物質の粒度が小さいこと、層の厚さも約40cmと薄いこと、上方粗粒化も明確でなく、上部で細粒化している部分もみられる。これらは土石流よりも流れの濃度や密度が低い、いわゆる土砂流からの堆積物(増田、2016)である。土砂流堆積物は土石流堆積物から側方変化することも確認されている(増田、2016)。しかし、すでに述べたようにこの土砂流堆積物には堆積物本体の礫よりも桁外れに大きい、径が1mを越える巨礫が含まれ、その礫はすべて長軸を流れに直交させた転動配列の姿勢で堆積している(第40図A、第41図A)。この巨礫は下位の第5層の土石流堆積物の上部に含まれていたものが再移動したものであることが、下位層を侵食した産状からわかる。第5層の堆積後に地表に突きでていた巨礫は、その上を流れた土砂流の渦でその基部が削られ、土砂流に巻き込まれ転動して再移動し、第4層に取り込まれていったのである。土砂流の運搬力が想像以上に大きいことをこの産状は示している。また、この層の一部には停止時に形成された剪断面が発達し(第44図)、その流れが高濃度であったことがわかる。第4層も第5層もその上部に土壌化した泥質砂層が堆積し(第41図)、土石流や土砂流がある程度の長い時間間隔で発生したことがわかる。さらにこの地点では最後の記録となる第4層の土砂流発生後、地点の南側が暫くは扇状地末端の湧水湿地帯であったことが、第3層の岩相と重なりからわかる。

この発掘地点では液状化層や噴砂などの地震動の痕跡は認められなかった。すなわち、土石流の発生原因が地震に伴うことを示す証拠は見いだせなかった。

まとめ

神戸市東灘区の郡家遺跡で観察できた3層の重力流堆積物は、弥生時代後期以前のもので、この地点はその後、古墳時代後期(5世紀後半～6世紀初頭)まで扇状地縁辺の湧水湿地帯であった。主体となる土石流堆積物(厚さ約1m)は、泥質で淘汰が悪く、巨礫をその上部に含



第43図 土石流堆積物の礫のみかけの長軸配列の変化

A: 第40図の断面線(1)の東側壁の断面、B: トレンチ(2)の西側壁の断面。Bの写真は古流向をAと合わせるため、南北を反転して表示している。上流(写真左側)傾斜のインプリケーション構造で停止した土石流は、ロープ末端(写真右側)ではさらにその上部が崩れて、下流傾斜で転動あるいは滑動して停止したことを示している。



第44図 土石流堆積物(第4層)に発達する停止時に形成された剪断面に沿って並んだ礫粒子。下部から上部にむけ上流(右側)傾斜の角度がやや急になっている。スケールは約20cm。

む上方粗粒化を示し、転動や浮遊からの堆積を示すインプリケーション構造など、典型的な岩相や堆積構造を示す。また、その上位に重なる土砂流堆積物は、層厚が約40cmと小さく細粒の砂礫層で、上方粗粒化から上方細粒化を呈し、停止時に形成された剪断面がみられる。その土砂流によって、下位の土石流堆積物の表層の巨礫の一部は洗濯され再移動した。

謝辞：神戸市教育委員会の千種 浩氏には発掘現場での観察と報告の機会を与えて頂き、また、山口英正氏には現場でのお世話や地層の年代などの情報をご教示頂いた。記して感謝申し上げます。

文献

- 神戸市教育委員会, 1990, 『郡家遺跡 神戸市東灘区所在御影中町地区第3次調査概報』, 31p.
- 増田富士雄, 1998, ダイナミック地層学—堆積と累重の過程を明らかにする新しい地層学. 深田研ライブラリー, 17, 71p.
- 増田富士雄, 1999, 北青木遺跡の海浜堆積物. 北青木遺跡発掘調査報告書, 神戸市教育委員会, 66-74.
- 増田富士雄, 2003, 神戸市本庄町遺跡で観察された浜堤の形成過程を記録した地層. 本庄町遺跡第9次発掘調査報告書, 神戸市教育委員会, 55-62.
- 増田富士雄, 2004, 堆積システムと堆積物. 堆積ショートコース, 日本堆積学会, 571p.
- 増田富士雄, 2005, 陸上土石流・水中土石流堆積物から堆積過程を読み取る. 京都大学防災研究所報告, 一般共同研究, 16G-09, CD, 14p.
- 増田富士雄, 2010, 地層と土石流堆積物. 雲井遺跡第28次発掘調査報告書, 10, 181-187, 神戸市教育委員会.
- 増田富士雄, 2014, 神戸市東灘区深江北町遺跡第12次調査地での自然堆積層. 深江北町遺跡第12・14次調査埋蔵文化財発掘調査報告書, 神戸市教育委員会, 171-182.
- 増田富士雄, 2016, 神戸市兵庫区祇園遺跡で観察された土石流と土砂流堆積物. 祇園遺跡第17・18次発掘調査報告書, 神戸市教育委員会, 94-101.
- 増田富士雄(編著), 2019, ダイナミック地層学, 大阪平野・神戸六甲山麓・京都盆地の沖積層の解析. 近未来社, 219p.
- 増田富士雄・谷口圭輔・佐藤喜英, 2014, 神戸市東灘区北青木遺跡第7次調査における堆積物と地層. 北青木遺跡第7次調査発掘調査報告書, 神戸市教育委員会, 107-124.
- 成瀬 元・田村 亨・久保雄介・増田富士雄, 2001, 重力流堆積物とその構造. 堆積構造入門シリーズ(2), 堆積学研究会(京都), 147p.
- 六甲土石流団体研究グループ, 2001, 六甲山地南麓扇状地での土石流・洪水堆積物の堆積時期・堆積場の変遷. 地球科学, 55, 201-216.
- 田中眞吾, 2007, 兵庫の地理. 地形でよむ大地の歴史. 神戸新聞総合出版センター, 222p.

第2節 郡家遺跡第95次調査にかかる古環境分析

一般社団法人 文化財科学研究センター

I. はじめに

郡家遺跡は、住吉川によって形成された扇状地に立地し、縄文時代早期、弥生時代中期から中世、近世の遺構・遺物が確認されている。弥生時代後期以降に集落が拡大し、飛鳥時代以降は、確認された遺構から菟原郡衙の推定地とされる。今回、残存する古墳時代後期の遺物包含層を中心に花粉分析、珪藻分析を行い、古環境および植生の復原を行う。

II. 試料

分析試料は、第95次調査の調査区南壁より採取された試料3点である(第7図)。試料①(サンプルI)は、灰色砂質土で近世耕作土、試料②(サンプルH)は黒灰色砂質土で、古墳時代遺物包含層、試料③(サンプルG)は無遺物層の淡茶灰色粗砂混じり粘質土である。なお、参考のため、試料①(サンプルI)の下層についても分析を行なった。

III. 花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、第四紀学で多く扱われ、生層序によるゾーン解析で地層を区分し、ゾーン比較によって植生や環境の変化を復原する方法である。そのため普通は湖沼などの堆積物が対象となり、堆積盆単位など比較的広域な植生・環境の復原を行う方法として用いられる。遺跡調査においては遺構内の堆積物など局地的でかつ時間軸の短い堆積物も対象となり、より現地性の高い植生・環境・農耕の復原もデータ比較の中で行える場合もある。さらに遺物包含層など、乾燥的な環境下の堆積物も対象となり、その分解性も環境の指標となる。

また、風媒花や虫媒花などの散布能力などの差で、狭い範囲の植生に由来する結果が得られるなど、陸域の堆積物が分析に適さないわけではない。

2. 方法

花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cmを採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.25mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトリス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す
- 6) 再び水酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈澱にチール石炭酸フクシン染色液を加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、鳥倉(1973)、中村(1980)を参照

して行った。イネ属については、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。なお、花粉分類では樹木花粉(AP)および非樹木花粉(NAP)となるが非樹木花粉(NAP)は草本花粉として示した。

3. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉1、草本花粉3、シダ植物胞子1形態の計5である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、顕微鏡写真にも示した。同時に寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

[樹木花粉]

スギ

[草本花粉]

イネ科、イネ属型、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

単条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

調査区南壁より採取された試料4点について、花粉構成と花粉組成の特徴を記載する。

1) 試料①(サンプルI): 近世耕作土

密度が極めて低く、検出されなかった。

2) 試料②(サンプルH): 古墳時代遺物包含層

イネ属型が検出された。微細植物遺体片の分解質遺体片が比較的多い。

3) 試料③(サンプルG): 淡茶灰色粗砂泥じり粘質土

イネ科が検出された。微細植物遺体片の分解質遺体片が比較的多い。

4) 試料④(サンプルI下層): 近世耕作土

スギ、イネ科、イネ属型、ヨモギ属、シダ植物単条溝胞子がわずかに検出された。

4. 花粉分析から推定される植生と環境

分析の結果、密度が極めて低く、試料①(サンプルI)、試料②(サンプルH)、試料③(サンプルG)、試料④(サンプルI下層)は、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったと推定される。試料①(サンプルI)は近世耕作土であり、畑作または裏作による環境下で花粉などの有機質が分解されたとみられる。試料②(サンプルH)ではイネ属型がわずかに検出されたが、風媒花植物であることから周辺または地域の水田からの反映とみられる。試料③(サンプルG)では風媒花植物のイネ科がわずかに検出され周辺または地域の雑草類からの反映とみられる。試料④(サンプルI下層)からはスギ、イネ科、イネ属型、ヨモギ属が検出され、周辺にスギ林の分布や、イネ科、ヨモギ属の比較的乾燥を好む草本の生育と、水田の分布が示唆される。

分類群		①	②	③	-
学名	和名	I(上層)	H	G	I(下層)
Arboreal pollen	樹木花粉				
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ				1
Nonarboreal pollen	草本花粉				
Gramineae	イネ科			1	1
<i>Oryza type</i>	イネ属型		1		1
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属				1
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolate type spore	単条溝胞子				1
Arboreal pollen	樹木花粉	0	0	0	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	1	1	3
Total pollen	花粉総数	0	1	1	4
Pollen frequencies of 1cm ²	試料1cm ² 中の花粉密度	0	0.8 ×10	0.7 ×10	1.8 ×10
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	0	0	0	1
Parasite eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal · woods fragments	微細炭化物・微細木片	(+)	(+)	(+)	(+)
微細植物遺体(Charcoal · woods fragments) (×10 ³)					
未分解遺体片					
分解質遺体片		4	44.7	15.7	3.8
炭化遺体片(微粒炭)					0.3

表3 郡家遺跡第95次調査における花粉分析結果

IV. 珪藻分析

1. はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

2. 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から1cm²を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗(5~6回)
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作製
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600~1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

3. 結果

(1) 分類群

試料から出現した珪藻は、真-中塩性種(海-汽水生種)1分類群、中-貧塩性種(汽-淡水生種)1分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端2個につき1個と数えた。分析結果を表2に示し、顕微鏡写真に示した。以下に出現した主要な分類群を記載する。

[真-中塩性種]

Cocconeis scutellum

[中-貧塩性種]

Rhopalodia gibberula

(2) 珪藻群集の特徴

調査区南壁より採取された試料4点について特徴を記載する。

1) 試料①(サンプルI): 近世耕作土

検出されなかった。

2) 試料②(サンプルH): 古墳時代遺物包含層

わずかに好塩性の*Rhopalodia gibberula*が検出された。

3) 試料③(サンプルG): 淡茶灰色粗砂混じり粘質土

真-中塩性種で、付着生の海水藻場指標種の*Cocconeis scutellum*が検出された。

4) 試料④(サンプルI下層): 近世耕作土

検出されなかった。

4. 珪藻分析から推定される堆積環境

分析の結果、珪藻密度は極めて低く、各試料とも珪藻の生育しにくい乾燥した堆積環境が推定される。

1) 試料①(サンプルI): 近世耕作土

珪藻が検出されず、珪藻の生育できない乾燥した環境が示唆される。耕作においても畑地などの環境が考えられる。また、集約性の高い水田では珪酸濃度低下のため、珪藻殻形成不全が起り珪酸殻が溶脱して残存しないこともある。

2) 試料②(サンプルH): 古墳時代遺物包含層

わずかに好塩性の*Rhopalodia gibberula*が検出された。

3) 試料③(サンプルG): 淡茶灰色粗砂混じり粘質土

真-中塩性種で付着生の海水藻場指標種の*Cocconeis scutellum*が検出されたが、付着生のため飛沫などで空中飛散しないため、海藻由来の可能性が考えられる。

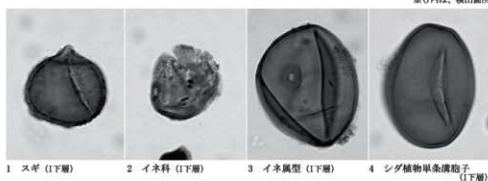
4) 試料④(サンプルI下層): 近世耕作土

試料④(サンプルI)と同様に珪藻が検出されず、珪藻の生育できない乾燥した環境が示唆される。耕作においても畑地などの環境が考えられる。また、集約性の高い水田では珪酸濃度低下のため、珪藻殻形成不全が起り珪酸殻が溶脱して残存しなかった可能性もある。

分類群	①	②	③	-
	I(上層)	H	G	I(下層)
中-貧塩性種(汽-淡水生種) <i>Rhopalodia gibberula</i>		1		
真-中塩性種(海-汽水生種) <i>Cocconeis scutellum</i>			1	
合計	0	1	1	0
未同定	0	0	0	0
破片	4	2	1	2
試料1 cm ² 中の殻数密度	0	0.2 ×10 ³	0.2 ×10 ³	0
完形殻保存率(%)	-	-	-	-

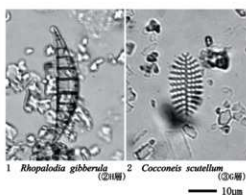
表4 郡家遺跡第95次調査における珪藻分析結果

※O内は、検出箇所



第45図 郡家遺跡第95次調査の花粉

10µm



第46図 郡家遺跡第95次調査の珪藻

V. まとめ

郡家遺跡において花粉分析および珪藻分析を行った結果、花粉および珪藻とも密度が極めて低く、試料①(サンプルI)、試料②(サンプルH)、試料③(サンプルG)、試料④(サンプルI下層)は、乾燥から乾湿を繰り返す堆積環境であったと推定される。試料①(サンプルI)は近世耕作土であるが、畑作が行われていたか、水田では乾田であったと考えられる。試料②(サンプルH)の古墳時代遺物包含層は周辺または地域での水田の分布と何らかの要因によって塩水が存在した可能性が考えられる。試料③(サンプルG)では周辺または地域のイネ科の雑草類の分布と、海藻の繁茂する環境からの汚染が認められ、試料④(サンプルI下層)からは周辺の

スギ林やイネ科やヨモギ属、シダ植物単条溝胞子の比較的乾燥を好む草本、シダ植物の分布と、水田の分布が示唆された。

参考文献

- 土質工学会編 (1979) 土質試験法, p. 2-5-1~2-5-23, 4-2-1~4-3-11.
- 金原正明・金原正子 (2013) 植生と農耕における土壌層分析の実証的研究, 日本文化財科学会 第30回大会研究発表会要旨集, p. 112-113.
- 金子清俊・谷口博一 (1987) 線形動物・扁形動物, 医動物学, 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p. 9-55.
- 金原正明・金原正子 (1992) 花粉分析および寄生虫, 藤原京跡の便所遺構-藤原京7条1坊-, 奈良国立文化財研究所, p. 14-15.
- 金原正明 (1999) 寄生虫, 考古学と動物学, 考古学と自然科学, 2, 同成社, p. 151-158.
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用, 東北地理, 42, p. 73-88
- Asai, Kand Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2)- Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.
- Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol, Suppl. 15, p.131-506.
- 伊東隆夫・山田昌久 (2012) 「木の考古学」, 雄山閣, p. 449.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用, 珪藻学会誌, 6, p. 23-45.
- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義-わが国への導入とその展望-, 植生史研究, no.1, p. 29-44.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用, 第四紀研究, 27, p. 1-20.
- 渡辺仁治 (2005) 淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数DAI_{po}, pH耐性能, 内田老鶴圃, 666p.

第4章 まとめ

第1節 調査地と周辺の動向

今回の調査では、弥生時代後期後半、古墳時代中期後半～後期、古墳時代後期以降の3時期の遺構を確認した。調査成果に基づき、調査地周辺の動向を整理する。

当該地は弥生時代後期以前の土石流堆積の末端部に位置し、弥生時代後期に居住域となる。北側に隣接する第17次調査区でも、同時期の集石墓と今回の調査で検出した自然流路SD301に接続する流路が検出されており、城ノ前地区から篠ノ坪地区にかけて集落が展開していたことを追認した。SD301は弥生時代後期後半に埋没する。古墳時代中期後半(TK23・47型式期)に、弥生時代後期後半に埋没した自然流路を削り込む洪水が起こり、最上層や流路の肩部で完形の遺物が一定量出土している。堅穴建物SB202は、埋土からTK23～MT15型式期の遺物が出土しており、洪水後まもなく建てられたと考えられる。SB202がMT15型式期に廃絶した後、堅穴建物SB201が建てられ、その埋土からMT15～TK43型式期の遺物が出土している。

4区で検出した掘立柱建物SB205はTK23・47型式併行期に遡る可能性が高い。掘立柱建物は、MT15型式併行期以降に建てられたものが多いが、堅穴建物の分布が希薄であった旧岸本地区にも広がり、集落の拡大が想定される。堅穴建物数の激減と対応して掘立柱建物に推移していくことが想定されるが、棟数は少ない。後世の削平による影響を勘案しても、MT15型式併行期以降の遺物出土量は激減しており、集落の範囲は拡大しているが、集落規模は縮小しているといえる。

古墳時代後期以降(TK10型式期以降)の遺構については、層的に検出する事ができず、出土遺物も僅少であり時期の確定ができなかった。3区で検出したSB101は、大型の方形掘形を持つ掘立柱建物であり、第1次調査地点付近(大蔵地区)と第12次調査地点付近(下山田地区)で同様の建物が検出されている。これらは律令期の遺構であるが、SB101の時期を確定する遺物が無く、詳細は不明である。古墳時代後期以降の耕作痕については、第17次調査で鎌倉時代の遺構面が検出されており、当時期の生産域を示す遺構の可能性はある。

第2節 那家遺跡における古墳時代の集落変遷

当遺跡の集落動向については、既刊の報告書等によって検討されている^{1・2・3}。ここでは、今回の調査で検出された古墳時代の堅穴建物が、当遺跡の集落変遷上、どのような意味を持つのかを検討するため、古墳時代中期以降における堅穴建物のデータを集成した(表5・6)⁴。遺物の型式名や実測図が公開されていない資料を含め、確認できた棟数は113棟である。時期が公開されている85棟のデータを元に堅穴建物分布の変遷を整理した(図47)。公表されていない資料が多い事と、報告資料の年代観や型式比定の調整を十分検討していないため、今後修正が必要となる事を踏まえた上で、予察として堅穴建物の動向を検討する。

堅穴建物の動向

TK216型式期の建物は、遺跡南側の御影中町地区で4例確認されている。第77次調査SH05と第83次調査SB202はカマドを有し、当遺跡における須恵器導入と同時期にカマドの使用が開始された事を示している。TK208型式期の建物は、御影中町地区の他に、より高位の篠ノ坪地区に広がるが、3例を数えるに過ぎない。堅穴建物数が激増し最も盛行するのはTK23・47型

式期であり、城ノ前地区を中心に合計44例を数える。カマドや韓式系土器、滑石製品を伴う例が多い。MT15型式期には急激に棟数を減じ、8例まで減少する。これまで居住域であった御影中町地区では、新たな建物が確認されなくなる。TK10型式期には、城ノ前地区の第57次調査で、短期間のうちに7棟の建替が行われている特殊な例を含めて13例、TK43型式期は4例になる。

集落動向に影響を与えた要因の一つに、洪水があげられる。TK23・47型式期頃に河道が埋没する例は、城ノ前地区や低位の篠ノ坪地区等で確認されている。洪水性の堆積により短時間で埋没した例が大半で、堆積土からTK23・47型式期の遺物が大量に検出されていることから、居住域に大規模な被害を与えたことが想定される。当時期の竪穴建物の棟数が突出して多いのは、洪水により倒壊した住居の再建数も含まれていると考えられ、注意が必要である。しかしながら、TK23・47型式期の短期間に大規模な集落を構成し、終息した事を示している。東に隣接する住吉宮町遺跡においても、TK23・47型式期の洪水で集落や古墳が埋没しており、当地域の古墳時代中期後半から後期の集落構成を考える上で重要な事象である。また、洪水直後の流路上を居住域とする事は通常避けるべき事象であり、土地利用に対する何らかの制約があった可能性が考えられる。

以上の事から、今回の調査で検出した竪穴建物は、集落の最盛期に大きな被害をもたらした洪水の直後に建てられており、急激に衰退する集落を構成した建物と考えられる。今後、竪穴建物以外の建物の動向との比較や、住吉宮町遺跡での集落と古墳群の変遷及び、地震を含めた自然災害の発生時期を詳細に検討することにより、古墳時代中期後半から後期の六甲山系南麓の様相がより明らかになると考えられる。

註

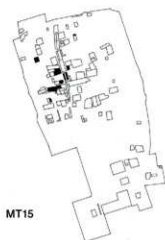
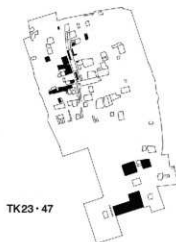
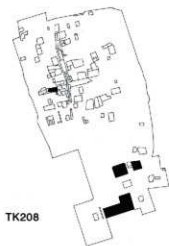
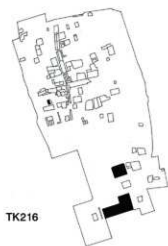
- 1 『郡家遺跡-神戸市東灘区所在 御影中町地区第4次調査』大手前女子大学史学研究所 1992
- 2 石鳥三和 『郡家遺跡第83次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2008
- 3 井尻 格 『郡家遺跡第85次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2011
- 4 表中の黒色は、遺物実測図が公開されている、または型式名が記載されている資料を示す。灰色は、「古墳時代後期」「6世紀」等、型式名の特定が困難な資料を示す。

次敷	所在地	新地名	住居名	TK73	TK216	TK208	TK23	TK47	MT15	TK10	TK43	TK209	カマド	渡石	櫛式	備考
5	舞影町舞影字城ノ前		SB03											○		
5	舞影町舞影字城ノ前		SB04											○	雁石	
5	舞影町舞影字城ノ前		SB05													SB05-03
5	舞影町舞影字城ノ前		SB06													
8-1	舞影町舞影字城ノ前		SB01													
8-1	舞影町舞影字城ノ前		SB02													
8-2	舞影町舞影字城ノ前		SB19									○				時期の記述なし
8-2	舞影町舞影字城ノ前		SB20													時期の記述なし
8-2	舞影町舞影字城ノ前		SB05									○				
8-2	舞影町舞影字城ノ前		SB06													
8-2	舞影町舞影字城ノ前		SB07													SB07-08-06
8-2	舞影町舞影字城ノ前		SB08													
8-2	舞影町舞影字城ノ前		SB09									○				SB09-17
8-2	舞影町舞影字城ノ前		SB12													
8-2	舞影町舞影字城ノ前		SB13										○			
8-2	舞影町舞影字城ノ前		SB14													
8-2	舞影町舞影字城ノ前		SB15													SB15-14・SB16-13
8-2	舞影町舞影字城ノ前		SB16									○				
8-2	舞影町舞影字城ノ前		SB17									○				
8-5	舞影町舞影字城ノ前		SB01										○			支脚石 TK208枡挿竿
8-5	舞影町舞影字城ノ前		SB02										○			後期 支脚石 カマドのみ 土石成で破壊
10	舞影町舞影字岸本		SB01													
11-1	舞影町舞影字城ノ前		SB03													11-6&SB01と同-
11-3	舞影町舞影字城ノ前		SB03													
11-3	舞影町舞影字城ノ前		SB04											○		西辺中央境土面
11-3	舞影町舞影字城ノ前		SB05													5c後半-6c初
11-3	舞影町舞影字城ノ前		SB08													
11-3	舞影町舞影字城ノ前		SB09													
11-3	舞影町舞影字城ノ前		SB10													
11-3	舞影町舞影字城ノ前		SB13													
11-3	舞影町舞影字城ノ前		SB14													
11-3	舞影町舞影字城ノ前		SB01										○			
11-3	舞影町舞影字城ノ前		SB11													
11-3	舞影町舞影字城ノ前		SB16										○			
11-4	舞影町舞影字城ノ前		SB01													11-1&SB03と同-
11-4	舞影町舞影字城ノ前		SB02													
13	舞影町舞影字城ノ前		SB01													6c中 SB04-02-01 5c後半河邊埋没
13	舞影町舞影字城ノ前		SB02										○			6c前半 SB05-02-01
13	舞影町舞影字城ノ前		SB03										○			5c末-6c初 SB05-03
13	舞影町舞影字城ノ前		SB04													5c末
13	舞影町舞影字城ノ前		SB05										○			時期の記述なし
14-3	舞影町舞影字城ノ前		SB04													
14-3	舞影町舞影字城ノ前		SB05													
14-4	舞影町舞影字城ノ前		SB02													
14-6	舞影町舞影字城ノ前		SB01													
14-6	舞影町舞影字城ノ前		SB02										○			21-1&SB02と同- L字形カマド
14-6	舞影町舞影字城ノ前		SB03										○			21-1&SB03と同-
14-6	舞影町舞影字城ノ前		SB04													21-1&SB04と同- SB04-03-02
17	舞影町舞影字城ノ前		SB04										○			SB04-05
17	舞影町舞影字城ノ前		SB05										○	○		L字形カマド
17	舞影町舞影字城ノ前		SB06										○			L字形カマド
18	舞影町舞影字上山田		SB01													6c末-7c初
21-1	舞影町舞影字城ノ前		SB02										○			14-6&SB02と同-
21-1	舞影町舞影字城ノ前		SB03										○			14-6&SB03と同-
21-1	舞影町舞影字城ノ前		SB04										○			14-6&SB04と同-
24	舞影町舞影字上山田		SB01											○		
25	舞影町舞影字上山田		SB01													
26	舞影町舞影字城ノ前		SB01													
29	舞影中町2丁目		SA01										○	○		
29	舞影中町2丁目		SA02													
29	舞影中町2丁目		SA03													

表5 郡家遺跡竈穴建物一覧表(1)

次敷	所在地	新地名	住居名	TK73	TK216	TK208	TK23	TK47	MT15	TK10	TK43	TK209	カマド	礎石	礎式	備考
29	御影中町2丁目		SA04													○
29	御影中町2丁目		SA05													
29	御影中町2丁目		SA06										△			
29	御影中町2丁目		SA08										○			SD08→09
29	御影中町2丁目		SA09													
29	御影中町2丁目		SA10													
29	御影中町2丁目		SA11										○	○		
29	御影中町2丁目		SA12										○			
31	御影町御影字城ノ前		SB02													
38	御影中町2丁目		SB01													5c末～6c初の堺5・洪水跡
40	御影町御影字藤ノ坪		SB01										○			5c中葉
41	御影町御影字藤ノ坪		SB02										○			L字形カマド 5c末～6c前半
41	御影町御影字藤ノ坪		SB03										○			SB05→03→02 SD06→02
41	御影町御影字藤ノ坪		SB05										○	○		
41	御影町御影字藤ノ坪		SB06										○			
47-2	御影町御影字城ノ前		SB01													6c初
51	御影町御影字藤ノ坪		SB01													
51	御影町御影字藤ノ坪		SB02													
52	御影町御影字城ノ前		SB201										△			後期
52	御影町御影字城ノ前		SB202													
54	御影町御影字藤ノ坪		SB04										○			
54	御影町御影字藤ノ坪		SB25													時期の記述なし
54	御影町御影字藤ノ坪		SB27										○			時期の記述なし
57	御影町御影字城ノ前		SB01										○			SB05→04→02→02→01
57	御影町御影字城ノ前		SB02													TK73の自然通路
57	御影町御影字城ノ前		SB03													
57	御影町御影字城ノ前		SB04										○			
57	御影町御影字城ノ前		SB05													
57	御影町御影字城ノ前		SB06													
57	御影町御影字城ノ前		SB07													
58	御影町御影字城ノ前		SB01													
61	御影町郡家字大蔵		壱穴住居1													後期
65	御影町御影字上ノ山		SB01													6c
72	御影町御影字城ノ前		SB01													
77	御影中町4丁目		SB01										○			SB06→01・SB02→08
77	御影中町4丁目		SB02										○			
77	御影中町4丁目		SB03													
77	御影中町4丁目		SB04										○			
77	御影中町4丁目		SB05										○			
77	御影中町4丁目		SB06													
77	御影中町4丁目		SB07										○			
77	御影中町4丁目		SB08										○			
77	御影中町4丁目		SB09										○	○		焼失住居
81	御影町御影字城ノ前		SB201													
81	御影町御影字城ノ前		壱穴住居										○			建替え
81	御影中町3丁目		SB201										○			
83	御影中町3丁目		SB202										○			
84	御影町御影字城ノ前		SB01													
84	御影町御影字城ノ前		SB02													
86	御影町御影字城ノ前	御影町御影1丁目	SB101													後期
86	御影町御影字城ノ前	御影町御影1丁目	SB201											○		5c
87	御影中町2丁目	御影中町2丁目	SB201										○			中期
89	御影町郡家字大蔵元	御影郡家2丁目	SB03													後期末
91	御影町御影字母本	御影2丁目	SK2002													5c
92-5	御影町御影字城ノ前	御影2丁目	SB201										○			5c
92-5	御影町御影字城ノ前	御影2丁目	SB202													5c
92-5	御影町御影字城ノ前	御影2丁目	SB203													
95	御影町御影字城ノ前	御影2丁目	SB201													TK23・47洪水→SB202→201
95	御影町御影字城ノ前	御影2丁目	SB202													東首りに礎上面
95	御影町御影字城ノ前	御影2丁目	SB203													

表6 郡家遺跡竪穴建物一覧表(2)



第47図 郡家遺跡竪穴建物の立地の推移

写 真 图 版



1・2区 第1遺構面全景(北東から)



1・2区 第1遺構面全景(北から)



1・2区 第1遺構面全景(北西から)



3・4区 第1遺構面全景(北西から)



3区 SB101 (南東から)



4区 耕作痕 (西から)

写真図版 4



1・2区 第2遺構面全景 (北東から)



1・2区 第2遺構面全景 (北から)



1・2区 第2遺構面全景(北西から)



1区 SB201(北から)



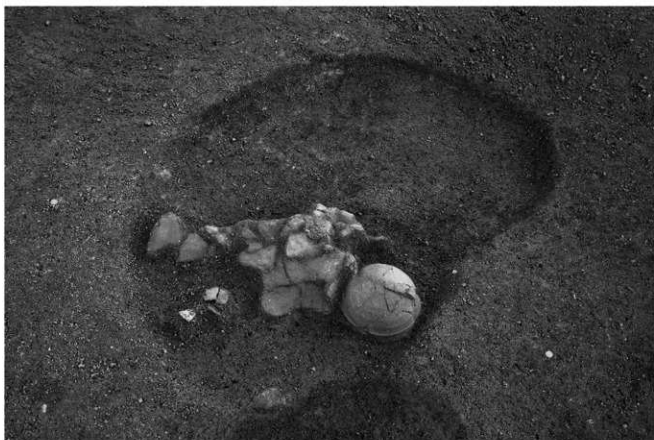
1区 SB201炭・白色粘土検出状況(南西から)



1区 SB202(南東から)



2区 SB203 (南西から)



2区 SK204 (西から)



4区 第2遺構面全景 (南西から)



4区 SB205 (南西から)



4区 南端部出土須恵器壺底部外面(西から)



4区 南端部出土須恵器壺肩部内面(北東から)



1・2区 SD301堆積状況(南から)



1・2区 SD301(北西から)



1・2区 SD301内SX301遺物出土状況(南東から)



1・2区 SD301内SX301遺物出土状況(北西から)



3区 SB301 (南から)



3区 SB301遺物出土状況 (北西から)



SB202出土遺物



SD301出土遺物





SD301内SX301出土遺物







報告書抄録

ふりがな	ぐんけいせきだい95じはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	郡家遺跡第95次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山口 英正 (編・著)							
編集機関	神戸市教育委員会							
所在地	神戸市中央区東川崎町1丁目3番3号 TEL 078-984-0742							
発行年	西暦2020年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
郡家遺跡	兵庫県神戸市東灘区御影2丁目13番1	28100	1-5	34度43分19秒	135度15分06秒	20181126 ～ 20190208	400㎡ 延べ800㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
郡家遺跡	集落跡	弥生時代後期～古墳時代後期		弥生時代後期竪穴建物、自然流路・古墳時代中期後半～後期竪穴建物、掘立柱建物、自然流路		須恵器・土師器・弥生土器		弥生時代後期以前の土石流堆積
要約								
神戸市東灘区に所在する郡家遺跡は縄文時代から中世に至る複合遺跡である。今回の調査では弥生時代後期の竪穴建物と自然流路、古墳時代後期の竪穴建物、掘立柱建物、自然流路、古墳時代後期以降の掘立柱建物と耕作面を検出した。								

郡家遺跡第95次発掘調査報告書

令和2年3月 印刷

令和2年3月 発行

発行 神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区東川崎町1丁目3番3号
TEL 078-984-0742

印刷 デジタルグラフィック株式会社
神戸市中央区弁天町1-1
TEL 078-371-7000

